

日本方言研究会

第115回

研究発表会

発表原稿集

▼午前の部 10時～12時00分

- 1) 滋賀県長浜市若年層の素材待遇形式の使用実態と運用方法の……………坪井菜央… 1
変遷について— (ヤ) アルの待遇型に注目して—
- 2) 近畿地方と首都圏における若年層の依頼及び ……………BAYU BAGUS MAHENDRA… 9
禁止言語行動の差—方言理解ツールへの示唆—

▼午後の部 13時30分～16時10分

- 3) テレビドラマにおける方言使用の実態と制作者の意図……………佐藤未依奈…17
- 4) 三重県における「お手玉」の呼び方の変異形の分布とその形成要因……………櫻井好基…25
- 5) 東京都のことばの年代差と地域差……………久野マリ子・竹内はるか・坂本薫…33
—新東京都言語地図—

付 録

- 方言関係新刊書目 ……………41
- お知らせ ……………奥付

令和4(2022)年11月5日(土)10時から

オンライン

日本方言研究会会則

昭和 62 年 5 月 22 日 制定

平成 30 年 6 月 16 日 改定

1. 本会は日本方言研究会（Cercle dialectologique du Japon : Dialectological Circle of Japan）と称する。
2. 事務所は日本国内におく。その場所は別に定める。
3. 本会は、日本方言研究の促進と研究者相互の連絡を目的とする。
4. 本会の事業は、(1) 年 2 回の研究発表会の開催、(2) 機関誌の発行、(3) その他、とする。
5. 会員は、日本の方言研究に関心を持ち、本会の活動に積極的に参加するものとする。このうち、本会からの情報の提供を受ける個人・団体を連絡会員、機関誌を定期購読する個人・団体を購読会員とする。手続きは別に定める。
6. 役員としては、世話人 12 名をおく。人選は世話人会が行う。世話人の任期は 4 年とし、2 年ごとに半数を改選する。世話人の 2 期重任は認めない。ただし 2 年後の再任は妨げない。
7. 本会の運営のために次の委員会をおく。委員会は世話人と世話人外の委員で構成される。
研究発表会委員会、編集委員会、総務委員会
研究発表会委員会は研究発表会に関する業務、編集委員会は機関誌に関する業務、総務委員会は他の委員会の管掌する業務以外のすべての業務を担当する。委員の任期は 4 年とし、同一の委員会における 2 期重任は認めない。必要に応じ、委員会を臨時におくことができる。その構成と任期は別に定める。
8. 経費は、(1) 会費、(2) 寄付金その他、でまかなう。会費の額等は別に定める。
9. 会則の改定手続きは、その都度定める。

世話人 新井小枝子・大橋純一・小川俊輔・小西いずみ・*小林隆・澤村美幸・
高木千恵・*二階堂整・*灰谷謙二・*半沢康・*船木礼子・*松田美香
(*は 2023 年 5 月まで、無印は 2025 年 5 月まで)

研究発表会委員 *小林隆（委員長）・*松田美香（副委員長）・大橋純一・高木千恵・
*竹田晃子・中西太郎・*林直樹・三樹陽介
(*は 2023 年 5 月まで、無印は 2025 年 5 月まで)

滋賀県長浜市若年層の素材待遇形式の使用実態と運用方法の変遷について

—(ヤ)アルの待遇型に注目して—

坪井菜央¹

1. はじめに

滋賀県では全域的に複数の素材待遇形式²が使われるが、特に長浜市では、主に近畿中部で使用されるハルや、その変化形で長浜市を中心に使用される(ヤ)アル、親愛の助動詞³と呼ばれ、主に滋賀県北部から岐阜県にかけて使用される(ヤ)ンスが使われる。本発表は、このように複数の素材待遇形式が使用される長浜市の、特に若年層が用いる素材待遇形式の実態と、その運用方法の変遷を明らかにするものである。

2. 先行研究と問題の所在

2.1. 近畿地方の素材待遇形式とその運用方法

近畿地方では広く共通語とは異なる素材待遇形式の運用がされている。それは、(a)本来上向き待遇を表していた形式が親愛語化することや下向き待遇の専用形式があること、(b)素材待遇形式の使用が第三者待遇場面に偏ることである。

まず(a)について、岸江(1998)は、大阪ではハルが尊敬語、ヤルが親愛語の機能を担うのに対し、京都ではハルが尊敬語から親愛語までを担っていること、また、ヨルやヤルが軽卑語的用法と親愛語的用法を持っていることを述べた。まとめると、近畿地方では中立待遇以下にも使用できる素材待遇形式が複数存在している方言がある一方、京都の特に女性の間では、ハルが待遇対象の範囲が広い唯一の形式となっている。

次に(b)について、宮治(1987)は、近畿地方の素材待遇形式の運用方法の特質は、待遇表現を話し相手待遇と第三者待遇とに分けた場合に、素材待遇形式全体としての用例が、第三者待遇に偏ることだと述べた。また、この第三者待遇偏用の成立の背景として、話し相手待遇場面では、対者待遇形式(丁寧語など)を使用できるが、第三者待遇場面では素材待遇形式しか用いることができないことを挙げている。

(a)と(b)は別個の現象ではなく、互いが連動して起きたものだと考えられる。辻(2001)は、京都のハルは本来の尊敬語としての機能が希薄化され、敬意のニュートラル化が起きた結果、「ハルをつけて言及することによって対象となる話題の主語が談話の場を構成して

¹ つばい なお (関西大学学部4年生) k550708@kansai-u.ac.jp

² 素材待遇形式とは、「待遇対象(聞き手または第三者)に対して、話し手がその関係性もしくは評価・感情などを表すために、待遇対象の動作・状態を表す動詞に用いる言語形式のことをいう」(酒井2015:22)。いわゆる「素材敬語」には尊敬語と謙譲語が含まれるが、ここでの素材待遇形式は謙譲語を除き、上向き待遇に限らず中立待遇や下向き待遇の形式も含む。

³ 岸江(1998)では、親愛語について「素材に対して、かわいいと思う気持ち、親しみをあらわす形式」と述べられている。「親愛の助動詞」という用語に関しては、寛(1982)に記述がある。

いる話し手や話し相手と対峙する三人称として少し隔て、同時に話し手と何らかの関わりをもつ「人」であることを指標として示す」(辻 2001 : 74)ようになったと述べている。

2.2. 滋賀県長浜市の素材待遇形式とその運用方法

滋賀県長浜市の素材待遇形式については、筧(1962)や酒井(2015)に記述がある。

筧(1962)は、湖北地域⁴で使用される素材待遇形式は、未然形接続の(ヤ)ハル(以下ア段ハル)、(ヤ)アル、(ラ)ル、ナハル、ヤス、(ヤ)ンスであるとしている。この内、(ラ)ルは老人が、ナハル、ヤスは中年以上の人が多く使う。また、(ヤ)アルは湖北地域のみで使われる。なお、連用形接続のハル(以下イ段ハル)は湖北地域では稀に使用される。

酒井(2015)は、長浜市の素材待遇形式の使用(規範)意識について、待遇価が(ヤ)ハル>(ヤ)アル>(ヤ)ンス>ヨルの順に高いこと、そして運用の特徴について、第三者待遇偏用の傾向は認められるが、第三者待遇場面において素材待遇形式がマークする使用対象が拡大するわけではなく、第三者マーカ―としては機能していないと述べている。また、その理由は、「複数の素材待遇形式を持つ長浜市方言では京都市方言のように第三者待遇で特定の素材待遇形式の適用範囲を広げる必要がなく、素材待遇形式を切り替えることで発話場を形成できるため、第三者待遇標示の機能を持っていないのではないか」(酒井 2015 : 178)としている。

2.3. 問題の所在

上に挙げた先行研究に対して、発表者は長浜市方言の若年層話者として、現在の長浜市では、これまでの記述と異なる素材待遇形式の使用実態があると感じた。それは、長浜市の若年層の間ではハルや(ヤ)ンスはほぼ用いられず、(ヤ)アルのみを使用する話者が大半を占めているということである。また、発表者の内省では(ヤ)アルは使用できる場面が第三者待遇場面に偏り、さらに第三者待遇であればほぼ全ての待遇対象に(ヤ)アルが使用できる。この内省が、複数の素材待遇形式を併用しなくなったことと関連があるのであれば、まずは長浜市の若年層の素材待遇形式の使用実態を調査する必要があると考えた。そこで、本研究では特に若年層の(ヤ)アルの使用実態に注目し、アンケート調査を行った。

3. 研究方法

自記入式のアンケート⁵を 2022 年 6 月 6 日から 10 日にかけて実施した。回答者は滋賀県

⁴ 滋賀県は湖東、湖西、湖南、湖北の 4 つの地域からなる。湖北地域は滋賀県の北東部に位置し、長浜市はこの湖北地域に属している。また、長浜市は市町村合併によって現在の形になっており、2022 年時点では湖北地域の大部分を長浜市が占めている。

⁵ Microsoft Forms で作成したウェブアンケートフォームを使用した。また、質問文の一部を【 】で囲んでいるが、これはハイライトしたい箇所を目立たせる意図で付けている。

長浜市出身の10～20代で、計173人(10代156人、20代17人)である。10代のアンケート回答者に関しては、滋賀県立虎姫高等学校の協力を得て実施した。

調査項目は、まず、長浜市の若年層が使用する素材待遇形式を確認するための設問を設定した。具体的な設問は以下の通りで、それぞれについて「よく言う」「たまに言う」「言わないが聞いたことがある」「言わないし聞いたことがない」という4つの選択肢を用意した。

(1) 各素材待遇形式の使用の有無を確認する調査項目

- 1-1 先生が【イカハル(行かはる)】
- 1-2 先生が【イキハル(行きはる)】
- 1-3 先生が【イカール(行かーる/行かある)】
- 1-4 先生が【イカル(行かる)】
- 1-5 近所の子どもが【イカンス(行かんす)】
- 1-6 近所の子どもが【イキヤル(行きやる)】

1-1、1-2の設問は、筧(1962)等で、滋賀県ではア段ハルが用いられるとされているが、現在の長浜市ではア段ハルとイ段ハルのどちらが用いられるのかを調べるために設定した。また、1-5、1-6では待遇対象を近所の子どもとした。これは、(ヤ)ンスとヤルが親愛語であることから、高校生にとって年下で、親しみやすい相手を想定したためである。1-4、1-6は湖北地域での使用はこれまで確認されていないが、隣接する湖東地域の若年層が使用するとされているため調査項目に追加した。

次に、素材待遇形式の運用方法がこれまでと変化しているかを確認するため、長浜市の素材待遇形式として特徴的な(ヤ)アルと(ヤ)ンスの運用方法を尋ねた。ここでは(ヤ)アルの質問文のみをあげるが、(ヤ)ンスの質問文も同様の内容である。回答の選択肢は「言う」「言わないがおかしくない」「言わないしおかしい」の3つを用意した。

(2) (ヤ)アルの運用方法を確認するための調査項目

2-1 対者待遇場面

あなたは【 】内の人物と話しています。【 】内の人物本人に「買い物に行く？」とたずねる時、「イカール(行かーる/行かある)」と言いますか。

→【 】本人に「買い物イカール？」(【先生】の時のみ「イカーリマスカ？」)

2-2 第三者待遇場面

あなたは友達Aさんと【 】内の人物について話しています。「【 】内の人物はよく買い物に行く」と言う時、「イカール(行かーる/行かある)」と言いますか。

→【 】はよく買い物にイカール

【 】内の人物は表1のように設定した。

表 1 調査項目 (2) の人物設定

身内		非身内		
目上	目下	目上	対等	目下
父/母	弟/妹	先生	友達 (第三者待遇場面では友達 B)	後輩

4. 分析

4.1. 長浜市若年層の素材待遇形式の使用実態とその変遷

図 1 は、調査項目 (1) の結果をグラフにしたものである。(ヤ)アル(1-3 イカール)は長浜市出身の 173 人中 153 人、つまり 88.4%の人が「よく言う」と回答している。また、寛(1962)等の先行研究で、長浜市で使用されると述べられていたア段ハル(1-1 イカハル)や(ヤ)ンス(1-5 イカンス)を「よく言う」と回答した割合は、両者とも

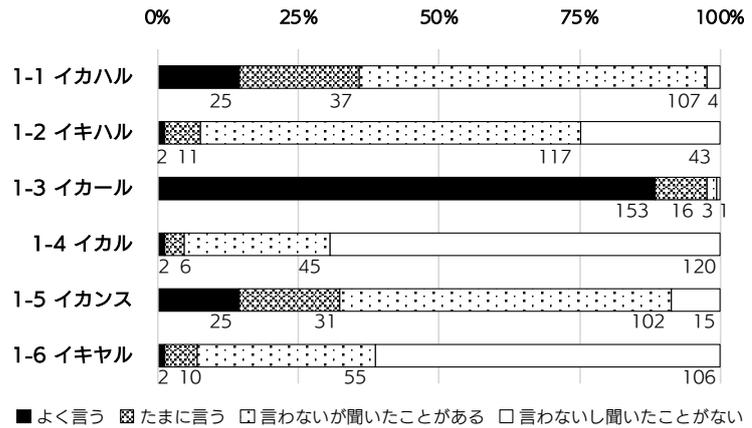


図 1 長浜市若年層の素材待遇形式の使用意識

14.5%にとどまった。つまり、(ヤ)アルは、長浜市の若年層の間で広く使われており、かつ他の素材待遇形式と比較しても圧倒的に高い使用率であるということがわかる。

ここで宮治(1987)を参照し、長浜市で使用される素材待遇形式の変遷を考察する。

表 2 各語形は誰に対して用いられるか (滋賀県) (宮治 1987 : 45)

人物	語形	人物											
		(行か)ハル	(行き)ハル	アル	レル	ナハル	ヤス	ル・ラル	ル・ヤル	ンス	シヤル	ヤル	ヨル
老年層	近所の年上 (上・疎)	172 (69・103)		16 (4・12)	3 (2・1)	18 (16・2)	5 (5・0)	45 (1・44)	5 (0・5)	21 (11・10)	7 (2・5)	2 (0・2)	1 (0・1)
	父親 (上・親)	66 (15・51)		10 (2・8)		4 (3・1)	1 (1・0)	61 (1・60)	9 (0・9)	40 (15・25)	8 (1・7)	4 (0・4)	4 (0・4)
	近所の年下 (下・疎)	78 (23・55)		8 (1・7)		5 (5・0)	3 (3・0)	38 (0・38)	3 (0・3)	26 (9・17)	4 (0・4)	8 (0・8)	37 (0・37)
	孫 (下・親)	1 (0・1)			1 (0・1)			21 (0・21)	1 (0・1)	10 (1・9)		20 (0・20)	90 (0・90)
高校生	近所の年上 (上・疎)	139 (35・104)	1 (0・1)	83 (20・63)	34 (28・6)			6 (0・6)	42 (0・42)	2 (0・2)		7 (0・7)	3 (0・3)
	父親 (上・親)	43 (0・43)		39 (0・39)				5 (0・5)	46 (0・46)	24 (0・24)		10 (0・10)	4 (0・4)
	近所の年下 (下・疎)	12 (1・11)		7 (0・7)				1 (0・1)	26 (0・26)	41 (0・41)		28 (0・28)	55 (0・55)
	弟か妹 (下・親)			3 (0・3)					14 (0・14)	24 (0・24)		22 (0・22)	95 (0・95)

注：(・)内の数字は待遇ごとの用例数を示す。左が話し相手待遇の場合、右が第三者待遇の場合。

表2は宮治(1987)から引用したもので、滋賀県内の老年層200人と高校生256人に対して「(〇〇は)どこに行くのか」と言うときに普通どのように言うかを対者待遇場面・第三者待遇場面で尋ね、その用例数を表にしている。表の数値は()内の用例数の合計値であり、回答者数を示すものではないが、この数値から以下のように回答者数の最大値と最小値を予想した。まず表2の「アル」の部分に注目すると、老年層で()内の用例数が最も多いのは第三者待遇場面の近所の年上で、12件である。老年層で(ヤ)アルを回答した人数の最小値は、それ以外の場面や待遇対象への回答が全て第三者待遇場面の近所の年上との併用回答である場合であるから、最小値は12人だと予想できる。次に、回答者数の最大値は併用回答がない場合であるため、表の「アル」の数値を全て足した34人が最大値と予想できる。同様に高校生の場合も予想すると、最小値は63人、最大値は132人となる。よって、老年層では12~34人が、高校生では63~132人が(ヤ)アルを回答したと考えられる。

また、宮治(1987)で実施された調査は、滋賀県全域での調査をまとめて集計しており、地域ごとの用例数は明らかになっていない。そこで、湖北地域出身者の人数も予想し、本研究でのアンケート調査の結果と比較した。人数を予想した手順は以下の通りである。

老年層は各市町村に最低男女1人ずつ選定されている。そして、滋賀県内の全50市町村(調査当時)に対する湖北地域13市町村の割合は26.0%である。調査対象者の人数もそれに比例すると想定し、全調査対象者200人の26.0%である52人を湖北地域出身者と仮定した。

高校生は調査対象校⁶に在籍し、父子二代にわたって現住所の生え抜きである生徒から選定している。滋賀県では1985年から6通学区制⁷が敷かれており、調査対象校は各通学区に1校ずつ設定されているため、各通学区で同程度の規模で調査をしていると考えた。よって、調査対象者256人を6で割った数を切り捨てた42人を湖北地域出身者と仮定した。

(ヤ)アルの回答者数と湖北地域の回答者数の予想から、宮治(1987)の時点では、湖北地域での(ヤ)アルの使用者は、老年層では23.1~65.4%、高校生では最低でも100%以上になることから、湖北地域だけでなく周辺地域にも(ヤ)アルが広がっていると考えられる。

以上本研究で行ったアンケート調査と宮治(1987)の数値を踏まえると、遅くとも1980年代中頃には長浜市の若年層で(ヤ)アルの使用者が急増し、以後約40年にわたって長浜市で使用される中心的な素材待遇形式として定着したと考えられる。また、(ヤ)アルの使用者の急増に関して宮治(1987)では、高校生で(ヤ)アルがハルの減少に対応する形で多く用いられると説明されている。このことから、湖北地域ではハルと(ヤ)アルを併用する状況から、(ヤ)アルが中心的に使用される状況に変化したと予想できる。

では、40年間長浜市で中心的に使用されてきた(ヤ)アルであるが、その間に運用方法の移り変わりはあったのだろうか。

⁶ 調査対象校は、虎姫高校、彦根東高校、水口東高校、玉川高校、膳所高校、高島高校の6校である。

⁷ 湖北通学区、湖東通学区、湖南通学区、甲賀通学区、大津通学区、湖西通学区の6通学区制である。

4.2. 長浜市若年層の素材待遇形式の運用方法とその変遷

調査項目(2)では、話者が(ヤ)アルをどのような運用方法で使用しているかを明らかにするため、図2のように(A)～(J)までの10の待遇型を設定して分析した。待遇型は、対者待遇/第三者待遇、身内/非身内、目上/目下⁸の3つの観点から分類し、たとえば第三者待遇のとき父/母に対して(ヤ)アルを「言う」あるいは「言わないがおかしくない」場合は、第三者待遇・身内・目上に●を、「言わないしおかしい」場合は×をつけるというように表を埋めた。今回は若年層の規範意識を明らかにするため、「言わないがおかしくない」も「言う」と同様の扱いをした。また、待遇型の上位分類として待遇型類を設定し、図2で色をつけた部分のように似た待遇型を一つの待遇型類とした。

上位待遇型類					第三者待遇型類					全待遇型類							
(A)	対者		第三者			(D)	対者		第三者			(G)	対者		第三者		
	身内	非身内	身内	非身内	身内		非身内	身内	非身内	身内	非身内		身内	非身内	身内	非身内	
上	●	●	●	●	上	×	×	●	●	上	●	●	●	●			
下	×	×	×	×	下	×	×	●	●	下	●	●	●	●			
(A)上位待遇型					(D)第三者待遇型					(G)全待遇型							
(B)	対者		第三者			(E)	対者		第三者			(H)	対者		第三者		
	身内	非身内	身内	非身内	身内		非身内	身内	非身内	身内	非身内		身内	非身内	身内	非身内	
上	×	●	●	●	上	×	×	●	×	上	●	×	●	●			
下	×	×	×	●	下	×	×	●	●	下	●	●	●	●			
(B)上位待遇型					(E)第三者待遇型					(H)全待遇型							
(C)	対者		第三者			(I)	対者		第三者			(J)	対者		第三者		
	身内	非身内	身内	非身内	身内		非身内	身内	非身内	身内	非身内		身内	非身内	身内	非身内	
上	×	●	●	●	上	●	●	●	●	上	●	●	●	●			
下	×	×	●	●	下	×	●	●	●	下	×	●	●	●			
(C)上位待遇型					(I)全待遇型					(J)全待遇型							
(F)	対者		第三者			(J)	対者		第三者			(J)	対者		第三者		
	身内	非身内	身内	非身内	身内		非身内	身内	非身内	身内	非身内		身内	非身内	身内	非身内	
上	×	●	●	●	上	●	●	●	●	上	●	●	●	●			
下	×	●	●	●	下	●	×	●	●	下	●	×	●	●			
(F)上位待遇型					(J)全待遇型					(J)全待遇型							

図2 長浜市の若年層の(ヤ)アルの待遇型

まず、待遇型ごとに人数を調べると表3のようになり、第三者待遇型類と全待遇型類の人数が多いことがわかった。また、宮治(1987)も同様に、論文に掲載されている情報から待遇型を推定して分類した。その結果、高校生で第三者待遇型(D)がやや見られるものの、老年層、高校生ともに上位待遇型(A)に類する型が中心であると見られた。よって、宮治(1987)と本調査から、(ヤ)アルの運用方法は上位待遇型→第三者待遇型→全待遇型と

⁸ 調査時は表1のように、非身内は目上/対等/目下の三段階に分けて人物設定を行ったが、対等と目下では調査結果にほぼ差がなかった。そのため、集計時は対等か目下のどちらかを「言う」もしくは「言わないがおかしくない」と回答していれば、目下で「言う」もしくは「言わないがおかしくない」と回答したものとして扱った。

いうように移り変わっていると想定できる。

表 3 長浜市の若年層の(ヤ)アルの各待遇型の回答者数

待遇型類		上位待遇型類		第三者待遇型類				全待遇型類					
待遇型	不使用	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	その他	総計
回答者数	1	1 (0)	6 (4)	42 (20)	21 (7)	3 (1)	6 (1)	43 (13)	13 (3)	4 (0)	6 (1)	27	173
		7		72				66					

※ () 内は「言う」のみの回答者数で内数

次に、第三者待遇型類と全待遇型類について分析した。まず、第三者待遇型類について、2.2.節で述べた通り酒井(2015)では、(ヤ)アルは第三者待遇場面で待遇対象が拡大しないため、第三者マーカ―ではないと述べられていた。しかし、今回の調査では第三者待遇場面で待遇対象が目下にまで拡大するという第三者待遇型類の話者が72人と最も多く、現在では(ヤ)アルは第三者マーカ―化していると判断できる。これは、長浜市では(ヤ)アルが中心的な素材待遇形式となり、待遇対象ごとに素材待遇形式を切り替えることがなくなったためと考えられる。つまり、第三者待遇型として用いられる(ヤ)アルは、京都のハルと同様に、尊敬語的用法から親愛語的用法までを広くカバーしており、待遇対象を三人称として少し隔て、同時に話し手と何らかの関わりをもつ「人」であることを示す形式となったと考えられる。

次に全待遇型類について、この待遇型類はこれまで見られなかったものであり、発表者の内省とも一致しない。そのため、全待遇型類の運用方法で(ヤ)アルを使用する話者に聞き取り調査を行った上で分析を行った。

4.3. 「全待遇型」話者の(ヤ)アルの使用意識

聞き取り調査は、聞き取り調査用の事前アンケートへの回答者14人のうち、結果が全待遇型に近かった長浜市出身の10代2人に行った。その結果、回答者2人に共通していたのは、第三者待遇場面の方が(ヤ)アルの使用は多いものの、対者待遇場面でも違和感なく使えること、(ヤ)アルを付けると付けない形と比較して軽く親しい印象が出ることである。

2.1.節で述べた通り、辻(2001)はハルについて、「ハルをつけて言及することによって対象となる話題の主語が談話の場を構成している話し手や話し相手と対峙する三人称として少し隔て、同時に話し手と何らかの関わりをもつ「人」であることを指標として示す」とまとめた。これと今回見られた全待遇型の(ヤ)アルと比較すると、まず全待遇型は待遇場面を問わず使用できるため、辻(2001)のような待遇対象を三人称として少し隔てるという機能は持っていない。次に、全待遇型の(ヤ)アルを付けることで軽く親しい印象が出るという点について、これは辻(2001)の言う「話し手と何らかの関わりをもつ「人」であること」

を示す指標と同様のものとして解釈できるのではないか。つまり、全待遇型として用いられる(ヤ)アルは、話し手が素材を「親愛的な関係性の「人」とみなしていることを表す形式であると言える。また、宮治(1987)では素材待遇形式の第三者待遇偏用について、対者待遇場面では対者待遇形式による待遇が可能であるため、素材待遇形式の必要性は薄いと説明した。しかし、全待遇型の(ヤ)アルが親愛語的用法を持つとすると、(ヤ)アルは対者待遇形式による待遇だけでは表現できない意味を持っていることになる。よって、親愛語的用法を獲得したことが対者待遇場面でも(ヤ)アルを使用できるようになった要因であると考えられる。

ただし、アンケート調査では全待遇型以外にも複数の待遇型が見られる上、全待遇型類の中でも運用方法の揺れが見られる。よって、必ずしも全ての話者の間で(ヤ)アルが親愛語的用法を獲得したとは限らず、(ヤ)アルの運用方法は過渡的段階にあると言える。

5. まとめ

本研究で新しく明らかになったことは以下にまとめられる。

1. 現在の長浜市の若年層の間では、(ヤ)アルが中心的な素材待遇形式となっている。
2. 長浜市出身の若年層の(ヤ)アルの運用方法について、アンケート結果を10の待遇型と3つの待遇型類に分類した。その結果、第三者待遇型類と全待遇型類が多数を占める結果となった。
3. (ヤ)アルの運用方法は、上位待遇型→第三者待遇型→全待遇型へと変化している。
4. 第三者待遇型は、(ヤ)アルが長浜市の中心的な素材待遇形式となり、第三者マーカ一化したことで生まれた。また、全待遇型は、(ヤ)アルが親愛語的用法を獲得し、対者待遇場面でも使用できるようになったことで生まれた。

参考文献

- 井上史雄(1981)「敬語の地理学」『国文学 解釈と教材の研究』26-2, 学燈社
- 笈大城(1962)「滋賀県方言」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 笈大城(1982)「滋賀県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学7 近畿地方の方言』国書刊行会
- 岸江信介(1998)「京阪方言における親愛表現構造の枠組み」『日本語科学』3, 国立国語研究所
- 酒井雅史(2015)「滋賀県長浜市方言の素材待遇形式に関する記述的研究」大阪大学博士論文
- 総理府統計局編(1982)『昭和 55 年国勢調査解説シリーズ No. 2 都道府県の人口その 25 滋賀県の人口』財団法人日本統計協会
- 辻加代子(2001)「京都市方言・女性話者の「ハル敬語」—自然談話資料を用いた事例研究—」『日本語科学』10, 国立国語研究所
- 辻加代子(2009)『ハル敬語考—京都語の社会言語史—』ひつじ書房
- 宮治弘明(1987)「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151, 国語学会

近畿地方と首都圏における若年層の依頼及び禁止言語行動の差

一方言理解ツールへの示唆

Bayu Bagus Mahendra¹

1. はじめに

近畿地方のような方言を志向する環境に置かれている、日本語学習者数は増加している。しかし、彼らのための方言理解ツール（以下ツール）は十分とはいいがたく、方言を授業で取り上げている教育機関も少ない（高村、内藤 2016）という現状にある。具体的には『聞いておぼえる関西（大阪）弁入門』（2006）、『JF にほんご e-ラーニングみなど』の 2018 年に開講された「関西弁入門 A2 自習コース」、『Colloquial Kansai Japanese まいど！おおきに！関西弁』（1995）、『Kansai Japanese: The Language of Osaka, Kyoto, and Western Japan』（1993）などのようなこれまでのツールは聞く能力を促進するツールが多いため、次の 2 点の特徴が挙げられる。一点目は日本語学習者が会える可能性の低い会話例などである。二点目は地域のコミュニケーションの取り方を反映させない、標準語から方言形式への表現の置き換えである。この背景を受けて、学習者が従来のツールを参考にし、実際の会話で方言の使用を試みることは適切に行えるとはいいがたい。外国人に対する方言の使用は道案内を求める場面のような基礎段階の言語使用場面に認められたこと（ロング 1991）を踏まえて、初級日本語教材に指導項目として多く取り上げられる言語行動の目的の「依頼」と「禁止」を中心に、今後のツールへの応用に向けて、俚言（言語形式）のような比較的に気づきやすい差異ではなく、これまで指摘されてきた言語行動の地域差（篠崎 2010；小林、澤村 2014）を明らかにする必要があると考えられる。

2. 先行研究

言語行動の地域差を見出すことを目指している研究は様々な場면을対象に、具体的な言語形式（表現）の使用や、行動の営みのパターンなどを分析してきた。また、そういった研究は複数の地域を対象にし、言語行動の地域差を見出そうとしている。多くの従来の研究は言語行動参加者や言語行動目的といった言語外的な制約条件を設定し、発話（或いは発話とされるもの）の内容を帰結として、そのパターン（規則性）を捉えるというミクロレベルの分析（渋谷 2003）を行っている。しかし、これまでの言語行動の地域差を巡る研究はツールの開発を念頭に置いた研究がまだなかった。

2.1. 依頼と禁止言語行動の地域差に関する研究

依頼行動と禁止行動の地域差を巡る従来の研究は小林（2021）、熊谷（2021）、岸江（2014）、熊谷、篠崎（2006）、三井（2002）、二階堂、鳥谷（2000）、二階堂、鳥谷（1999）が挙げられる。しかし、ツールへの応用を目指すうえではそれらの研究に対して、3 点指摘できることがある。1 点目は医者への往診の依頼（熊谷、篠崎 2006）や、孫に対する行為の防止（三井 2002）や、行きつけの店の人への依頼（2021）や、ゴミ出し違反の防止（岸江 2014）などのような設定された場面参加者と目的である。2 点目は高年層の協力者（小林 2021）や、女性大学生（三井 2002）などに限定された調査の協力者からデータを収集することである。3 点目は「呼びかけ」と「依頼」のような予め決められている回答の形（二階堂、鳥谷 1999）や、話の切り出し方（岸江 2014）などのような分析項目の範囲である。先行研究を踏まえ、詳しく後述する、日本語学習者にとってより身近な場面等を設定する必要があると考えられる。

¹ バユ・バグス・マヘンドラ（大阪大学大学院生） bayubgs23@gmail.com

3. 研究課題と研究方法

本研究は日本の大学や大学院等という環境で日本語で授業を受ける日本語学習者の場合、クラスメイトの日本人学生が使用する方言と接触することを想定し、以下の研究課題を設定する。

(ア) 近畿地方出身と首都圏出身の若年層（大学生と大学院生）の依頼と禁止の言語行動を分析する。

(イ) 言語行動目的を達成するにあたって、近畿地方出身と首都圏出身の若年層が使用する表現形式を明らかにする。

(ウ) (ア) と (イ) で明らかになったことを踏まえて、ツールへの応用の提案を試みる。

本研究は調査の方法としてアンケート調査（Google Form）を用い、回答方式として自由記入式を採用する。調査の対象者は田中、前田（2012）を参考にし、積極的方言話者のブロックと共通語話者のブロックとされる首都圏に生まれ育った 18 歳から 29 歳までの大学生又は大学院生である。アンケート調査には杉戸（1983）が提唱する「言語行動の目的・動機」を参考に表 1 の場面を提示し、それに合わせてどんな言い方をするかを書き込んでもらう。

表1. 調査の場面設定

場面名	質問項目
外的依頼	あなたは以前山田さん ² が気になっている本を山田さんに貸しました。山田さんはまだ読み終わっていないみたいですが、あなたは近々授業の発表のために、その本を読まなければなりませんので、山田さんに今日返すように頼みます。山田さんにどう言いますか。
外的禁止	あなたは図書館でたまたま山田さんを見かけました。山田さんはコピー機を使おうとしています。しかし、そのコピー機は教員専用のコピー機だとあなたは知っていますが、山田さんは知らないみたいです。あなたはそのコピー機を使おうとしている山田さんをやめさせます。山田さんにどう言いますか。
私的依頼	あなたは以前山田さんが気になっている本を山田さんに貸しました。山田さんはまだ読み終わっていないみたいですが、あなたはもう一回読みたいと思うので山田さんに返してもらうよう頼みます。山田さんにどう言いますか。
私的禁止	山田さんは共用のコピー機を使おうとしているが、あなたはまだそのコピー機を使っている最中なので、使おうとしている山田さんをやめさせます。山田さんにどう言いますか。

4. 結果と考察

本研究は合計 205 人の大学生又は大学院生からデータを収集した。その回答者の出身地の内訳を次ページに示す。そこから得られたデータは熊谷、篠崎（2006:22）が提唱する「機能的要素」という単位で分割し、その使用様相と、それを実現する際の表現の使用様相を比較し、小林、澤村（2014:165）が提唱する言語的発想法を参考にし、分析を行う。各場面に 10 種類ある機能的要素が出現したが、5 割以上使用された組み合わせにみられるもののみを示す。

² 調査に設定される「山田さん」はどの場面においても親しい同世代の人と設定する。

表2. アンケート調査の回答者の出身地の内訳

首都圏（割合）		近畿地方（割合）	
東京都	50人(52%)	大阪府	30人(28%)
埼玉県	14人(14%)	京都府	5人(5%)
神奈川県	9人(9%)	和歌山県	11人(10%)
千葉県	24人(25%)	三重県	18人(17%)
		兵庫県	22人(20%)
		奈良県	9人(9%)
		滋賀県	11人(10%)
合計	97人(100%)	合計	106人(100%)

表3. 【外的依頼】と【私的依頼】に観察される機能的要素

ラベル	機能的要素	具体例
A	行為要求の提示	カエシテナ
B	恐縮の表明	ゴメンヤケド
C	理由の提示	コッチモマタヨミタイカラ
D	条件の提示	モシヨカッタラヤケド
E	用件の提示	コノマエカシタホンヤネンケド
F	自己拘束	スグカエスワ

表4. 【外的禁止】に観察される機能的要素

ラベル	機能的要素	具体例
A	一般情報の提供	ソノコピーキハキョウインセンヨウダヨ
B	行為防止の提示	ヤメトキ
C	代替の行為の提示	ガクセイヨウハアッチニアルヨ
D	行為の不可能の言及	ツカワワレヘンデ

表5. 【私的禁止】に観察される機能的要素

ラベル	機能的要素	具体例
A	理由の提示	イマツカッテルカラ
B	行為要求の提示	マッテモラッテモダイジョウブ?
C	恐縮の表明	ゴメンネ

4.1. 機能的要素の分析— (ア) に対する答え—

各場面にみられる機能的要素の組み合わせを分析した結果、両地域ともどの場面においても同程度の使用率かつ同じ組み合わせで機能的要素を使用することが観察される。【外的依頼】において、理由を提示し、行為要求を提示するという機能的要素の組み合わせによる言語行動が最も多く見られる。しかし、わずかな使用率であるが、両地域において 2 番目に多く見られる組み合わせがそれぞれ異なる。場面別で最も多く使用された組み合わせを以下に示す ([]の中は各ブロックの該当の組み合わせの使用率と回答数)。

【外的依頼】

1. 今度授業で使わなあかんし^C、この前貸した本返してもらっていい?^A (滋賀県 19 歳) [26%,28]
2. もうすぐ授業の発表があるからさ^C、今日本返してもらってもいい?^A (神奈川県 21 歳) [28%,27]
3. この前貸した本やねんけど^E、今度の授業で必要で、もう一回読み直したいから^C、返してくれへん?^A (奈良県 23 歳) [9%,10]
4. ごめん!^B 授業の発表で貸した本使いたいから^C 一旦返してくれない?^A 使い終わったらまた貸すから!^F (東京都 20 歳) [11%,11]

さらに、【私的依頼】においても、【外的依頼】とは異なる組み合わせの使用率ではあるが、両地域は同程度の使用率で同じ組み合わせによる言語行動を取ることが観察される。その具体例は以下に示す。

【私的依頼】

5. ちょい読みたいから^C 返して^A (兵庫県 19 歳) [15%,16]
6. 私も読みたくなったから^C、今度返してもらっても大丈夫?^A (埼玉県 22 歳) [16%,16]

禁止行動に関しても似たような傾向が窺える。以下に示されるように、各地域ではそれぞれ異なる使用率で用いられるが、上位の組み合わせとして同じ機能的要素の組み合わせが観察される。具体例は以下に示す (太字は該当ブロックにおいて使用率が最も多かった組み合わせを示す)。

【外的禁止】

7. それ先生専用のやつやで^A (京都府 19 歳) [21%,20]
8. そのコピー機は教員専用だよ^A。(千葉県 25 歳) [26%,25]
9. それ先生専用らしいから^A、多分使えやんで^D (和歌山県 22 歳) [23%,24]
10. それ教員専用だから^A 使えないよ^D (神奈川県 19 歳) [13%,13]

【私的禁止】

11. あ、ごめん^C、それ今自分使ってるから^A、もうちょっと待ってな!^B (京都府 21 歳) [23%,25]
12. ごめん^C、まだコピー機使ってるから^A もうちょっと待って^B。(神奈川県 19 歳) [20%,19]

このような両地域における機能的要素の組み合わせの使用傾向は近畿地方と首都圏の言語的発想法の発達状況 (小林、澤村 2014) と深く関わっていると考えられる。つまり、発達地域とされる近畿地方と準発達地域とされる東京及びその周辺の地域は近い傾向を示す (ibid 2014:170)。しかし、一人当たりの機能的要素の使用数と、機能的要素の使用順を見てみると、近畿地方の若年層は【私的依頼】や【私的禁止】などのような私的領域と密接する場面を配慮性が求められる場面として捉え、その場面においては発話量を増やす傾向にあると同時に、恐縮の表明より事情や理由を提示することを優先し、話し手の意図を効果的に伝達することを志向するという特徴が観察される。まず、発話量については次の図に示す。

図1と図2から分かるように、近畿地方の若年層は首都圏の若年層に比して、対照的な機能的要素の数の増やし方を示している。このような結果は行為の要求及び行為の防止の正当性と関わっており、私的領域と密接する場面における行為の要求及び行為の防止の正当性は低いため、機能的要素を多く使用することはそれを補うともいえよう。また、図3と図4から分かるように、機能的要素の使用順に関しては首都圏ではどの場面においても理由を提示するよりも、恐縮の表明を先に提示することが8割以上を占めているのに対して、近畿地方では場面に応じて機能的要素の使用順の調節が観察されることが明らかになった。具体的には【私的禁止】のような私的要素が少ない（話し手が単に今使っているという要素に限る）場面では首都圏と同様に恐縮を表明することが優先される回答が8割以上占めているが、【私的依頼】のような私的要素が比較的に多い（話し手が所有する本を自ら読みたい）場面では理由の提示が優先される回答が多くなることが明らかになった。つまり、首都圏の若年層はどの場面においても恐縮表明が維持されるのに対して、近畿地方の若年層は場面に応じて、理由の提示を優先することが許容されることが窺える。

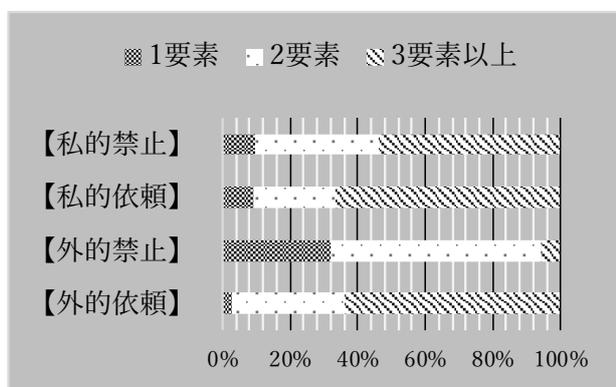


図1 近畿地方の若年層の機能的要素の使用数

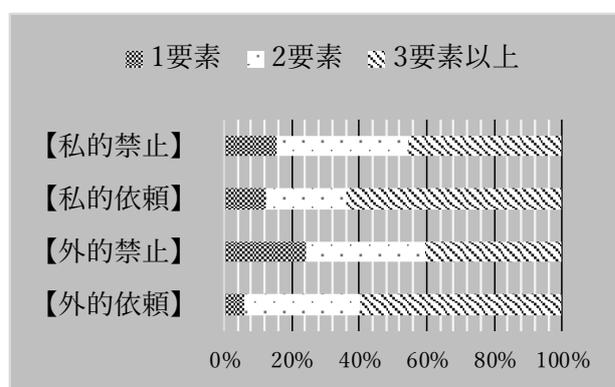


図2 首都圏の若年層の機能的要素の使用数

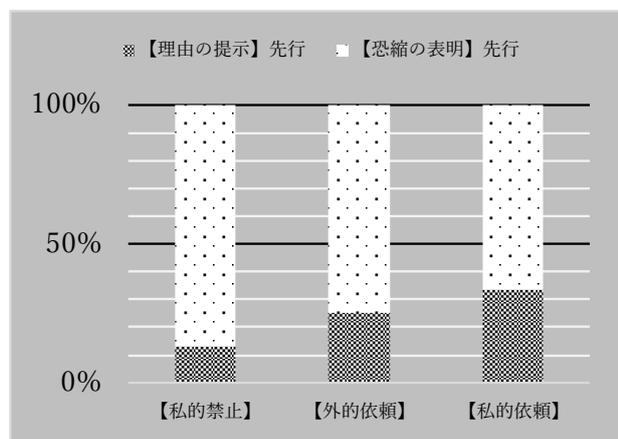


図3 近畿地方における機能的要素の使用順

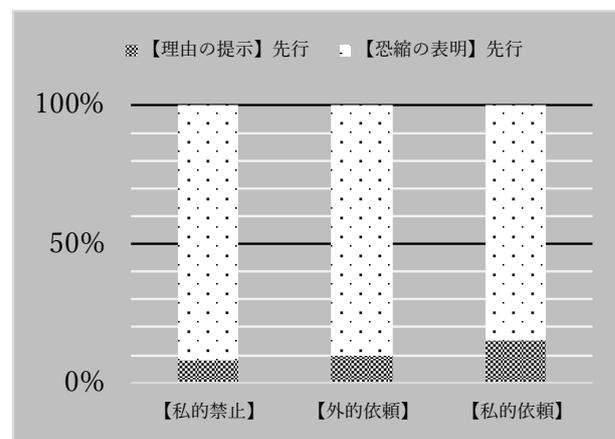


図4 首都圏における機能的要素の使用順

4.2. 言語表現の分析一（イ）に対する答え一

上述したように、例え同じ機能的要素を使用するとしても、それに組み込まれる表現は多様である。その多様な表現の中には直接的な表現もあれば、間接的な表現もある。その表現の使用も地域のコミュニケーション特徴の形成につながるため、その使用を明らかにする必要があると考えられる。まず、先行研究の（中村、阿久井 2004；高木 2009；岸江 2009；國澤 2014）表現の枠組みを参考にして、分析を行った。両

地域とも、間接的表現は【外的依頼】では9割近く（データ 13；14）用いられ、【私的依頼】では8割近く（データ 15；16）用いられるが、【私的禁止】では直接的表現（データ 17；18）が6割以上用いられることが明らかになった。しかし、「チョット」や「スコシ」や「イッタン」などのようなその表現と共に使用される負担軽減の有無を見たところ、図5と図6に示されるように【私的禁止】においては両地域とも負担軽減を伴う表現が多かった（データ 19；20）。しかし、【私的依頼】においては首都圏の若年層は負担軽減の使用を維持するのに対して、近畿地方の若年層は負担軽減を伴わない表現の使用を許容することが明らかになった。つまり、近畿地方の若年層は【私的依頼】のような行為要求の正当性が中程度の場面においても間接的表現を用いることが維持されると同時に、相手への負担軽減を表す表現を使用しないことが許容されることが窺える。逆に、【私的禁止】のような行為の防止の正当性が低程度の場面においては直接的な表現を使用すると同時に、負担軽減を表す表現を共に使用する。そのような表現の調節を行うことで、言語行動のバランスを保つことができるといえよう。

- 13. 課題で必要になったから今日返して欲しいな（千葉県 20 歳）
- 14. あの本どうしても今必要やから一旦返してもらっていい？（兵庫県 19 歳）
- 15. ごめん前貸してた本もう 1 回読みたいから返してほしい！（兵庫県 22 歳）
- 16. それさ、私もう 1 回読みたいからなるべく早く返してくれると嬉しい（埼玉県 21 歳）
- 17. まだコピー機使ってるからちょっと待ってくれ。（和歌山県 18 歳）
- 18. そのコピー機まだ使ってるからちょっと待ってて（神奈川県 19 歳）
- 19. 山田さん、私まだ使ってる途中だから一瞬待ってもらっていい〜？（東京都 22 歳）
- 20. あ、ごめん。それ今俺使ってるから、ちょっと待ってて。（三重県 18 歳）

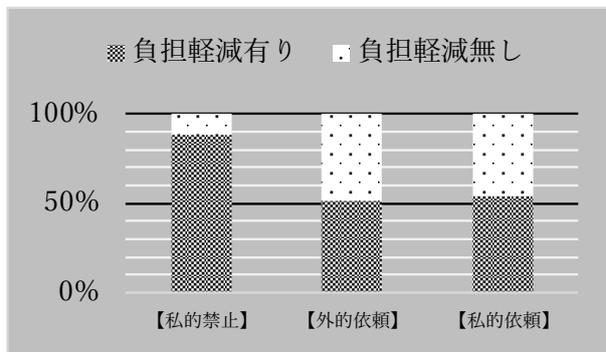
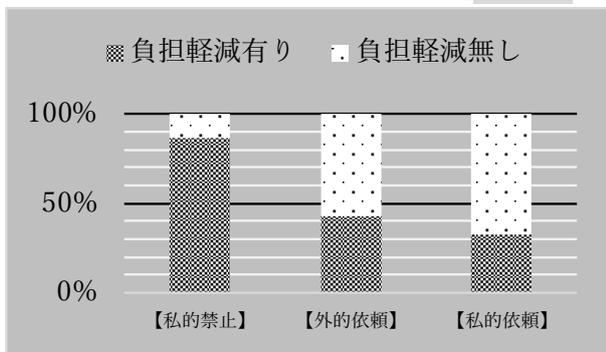


図5 近畿地方における負担軽減の有無

図6 首都圏における負担軽減の有無

さらに、【外的禁止】に関しても図7に示されるように両地域とも間接的表現を比較的に多く使用することが明らかになったが、図8に示されるように「教員専用のコピー機」や、「使えない」などという実態を述べる際に、近畿地方は「ラシイ」のような非断定や問いかけで表明することが少なく、断定するものが多い（データ 21;22）のに対して、首都圏では非断定や問いかけで表明することが多かった（データ 23;24）。

- 21. 山田さん、それ先生しか使ったらあかんやつやねん…（大阪府 21 歳）
- 22. そのコピー機教員専用やから、学生は使えやんよ（三重県 18 歳）
- 23. それ先生が使うやつじゃない？（東京都 18 歳）

24. そのコピー機、教員専用らしいよ（東京都 18 歳）

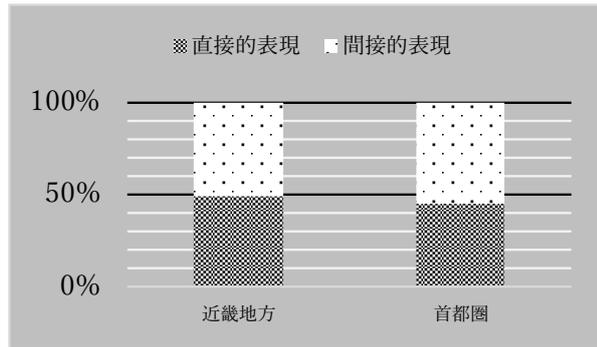


図7 近畿地方と首都圏における禁止表現の使用

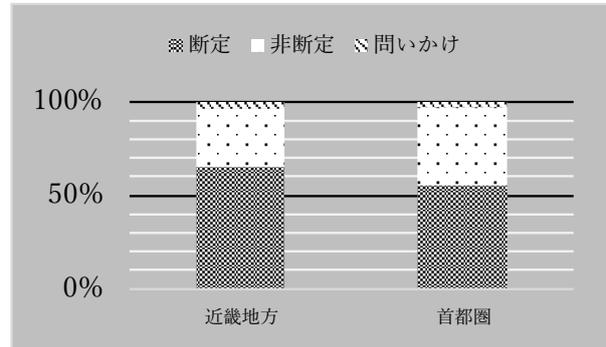


図8 近畿地方と首都圏における事実の述べ方

4.3. ツールへの応用—（ウ）に対する答え—

前節で述べた、地域ごとのコミュニケーション特徴の発見は従来のツールにみられる言語形式の置き換えという指導項目の不十分さを裏付ける。とりわけ、近畿地方の若年層のような厳密な言語行動の切換えを行う地域社会の成員の方言を扱うツールの開発においてはその切換えに目を向ける必要がある。そのため、今後のツールの開発に向けて、以下の点を示唆する。

1 点目は場面による言語表現の使用のパターン化を可視化することである。親しい相手に対する言語表現としてストレートな言い方を思い浮かべやすいが、本研究から分かるように、同じ親しい相手という設定でも、同じ言語行動の目的でも、使用される核の言語表現が異なるため、例えば日本語学習者が接触する親しい日本人学生に対しても、どのような状況下で直接的な表現の使用が許容されるか、同様に間接的な表現がどのような状況下で推奨されるかを可視化する必要があると考えられる。

2 点目はその言語表現はどのような対人配慮を示す要素が伴う（若しくは伴わない）かを可視化する必要があると考えられる。本研究はアンケート調査を行ったため、見出された対人配慮を示す要素が非常に限られている。また、本研究では相手への配慮を示す手段として、「チョット」、「スコシ」などのような相手の負担軽減を例に分析を行ったが、実際はその示し方が様々である。また、どのような状況下で相手に事情を効果的に話すことが許容されるか、あるいはどのような状況下でそれを後回しにし、恐縮の表明を優先すべきかというような対人配慮の提示の順序を可視化する必要がある。

3 点目は本研究で明らかになった発話の長さの差異は機能的要素という単位での回答の長さを指すが、場面にみられる行為要求・防止の正当性に応じた発話の長さの調節は相手に与える印象と関わるため、場面に応じて適度な発話の長さとしてそれを構成する要素を指導する必要がある。上述した3点を会話例の作成、例文の作成に応用するにあたって、行為要求・防止の正当性が重要なキーとなり、それに応じた使い分けを可視化する必要がある。その行為要求・防止の正当性の具体例は学校のルールや、先生の指示などのような日本語学習者が馴染みのあるものとして提示することが示唆される。

5. まとめ

本研究では表6に示すことが明らかになった。先行研究（熊谷 2021）が指摘している近畿地方の言語行動の特徴と一致しているが、場面にみる行為の要求・防止の正当性をもたらした新たな言語行動の特徴が確認できたので、どのような状況下にどのような特徴が現れやすいかという詳細な言語行動の特徴の発見は本研究の研究意義と言えよう。先行研究（ibid 2021:161）で指摘しているように、近畿地方ではストレートな言語表現を使用すると同時に、相手に配慮した働きかけを選択する。逆に、本研究で分かるように、婉曲な表現を使用すると同時に、相手に配慮する要素が選択されなくなる。つまり、近畿地方の若年層は言語

表現の婉曲さと対人配慮を示す要素のバランスの維持を同時に行うという特徴が窺える。

表6. 近畿地方における行為要求・防止の正当性による言語行動の調節

		【外的禁止】	【外的依頼】	【私的依頼】	【私的禁止】
正当性		高程度	中程度	中程度	低程度
【発言性】		低程度	中程度	中程度	高程度
【配慮性】	言語表現	間接的	間接的	間接的	直接的
	負担軽減の要素		伴わないことが許容される	伴わないことが許容される	伴う
	出現順序		理由提示を優先	理由提示を優先	恐縮表明を優先
	実態の述べ方	断定			

【参考文献】

岸江信介 (2009) 「四国における禁止表現と禁止言語行動」『方言の前衛』桂書房、pp.29-46.

岸江信介 (2014) 「現代語の依頼・禁止に見られる配慮表現」野田尚史, 高山善行, 小林隆編『日本語の配慮表現の多様性：歴史的变化と地理的・社会的変異』,pp.205-222,くろしお出版.

國澤里美 (2014) 「現代日本語における認識のモダリティ—世代差が生じる要因—」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻.

熊谷智子、篠崎晃一 (2006) 「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」『言語行動における「配慮」の諸相』 pp.19-54, 国立国語研究所.

熊谷智子 (2021) 「おつりが足りないとき、何というか—近畿の言語行動についての仮説—」小林隆編『全国調査による言語行動の方言学』 pp.143-163,ひつじ書房.

小林隆、澤村美幸 (2014) 『ものの言い方西東』、岩波書店

小林隆 (2021) 「依頼・受託の言語行動—配慮性と主観性の観点から—」小林隆編『全国調査による言語行動の方言学』 pp.29-60,ひつじ書房

篠崎晃一 (2010) 「働きかけの地域差」『方言の発見』 pp.107-118,ひつじ書房

渋谷勝己 (2003) 「言語行動の研究史」『朝倉日本語講座 9 言語行動』、朝倉書店

杉戸清樹 (1983) 「待遇表現としての言語行動—「注釈」という視点—」『日本語学』 2.7,pp.32-42, 明治書院

高木千恵 (2009) 「禁止表現」『方言文法調査ガイドブック 3』 pp.131-142.国立国語研究所全国方言調査委員会

高村めぐみ、内藤真理子 (2016) 「関西在住短期留学生の方言意識と習得意欲」『関西学院大学日本語教育センター紀要』 5、 pp.23-30

田中ゆかり、前田忠彦 (2012) 「話者分類に基づく地域類型化の試み全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討」『国立国語研究所論集』 3,pp.117-142

中村真、阿久井香織 (2004) 「依頼表現の間接性に関する研究—被依頼者の視点から—」『川村学園女子大学研究紀要』 15： pp.99-115. 川村学園女子大学

二階堂整、鳥谷善史 (1999) 「依頼表現の変化と地域差について」『地域言語』 11、 pp.30-43 天理・地域言語研究会

二階堂整、鳥谷善史 (2000) 「禁止表現の変化と地域差について」『地域言語』 12、 pp.61-70 天理・地域言語研究会

三井はるみ (2002) 「働きかけの表現の地域差へのアプローチ—禁止表現を例として—」『日本語学』 21.11,pp.36-47,明治書院

ロング・ダニエル (1992) 「日本語教育における「方言教育」の問題点」『日本語教育』 76,pp.42-54 日本語教育学会

テレビドラマにおける方言使用の実態と制作者の意図

佐藤 未依奈¹

1. はじめに

近年、日常生活のいたるところで方言を目にする。これは、現代における方言が社会のさまざまな場面に進出し、実践的に使用されることが多くなってきているためである。実践的な方言使用の例としては、方言の商品化や方言掲示物などがあげられるが、そのひとつにテレビドラマ（以下、ドラマ）における方言使用がある。ドラマで使われる方言は、制作者が現実の方言を基盤として作りだした、いわば仮想的な方言といえるものである。それでは、ドラマの方言では、現実の方言からどのようなものが選ばれ、どのように利用されているのだろうか。また制作者はどのような効果を期待し、ドラマに方言を出現させているのだろうか。本発表では、ドラマの方言を制作者側の観点から検討することで、ドラマにおける方言使用の実態を把握し、そこに込められた制作者の意図を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と未検討の問題

ドラマにおける方言の研究には、制作者側からの研究と視聴者側からの研究の2つの観点がありうる。前者は、ドラマの方言の在り方や効果などを検討するものであり、田中(2011)などがあげられる。後者は、ドラマの方言の評価や聞き取りなどを検討するものであり、熊谷(2019)、中井(2019)などがあげられる。研究の進め方としては、前者の研究の知見を踏まえて後者の研究を展開すべきであり、その点では、まず、制作者側からの研究の充実が求められる。そのため本発表では、制作者側の観点からドラマの方言を検討していく。

ところで、制作者側からの研究といっても、先述の田中(2011)は西郷隆盛や大久保利通など、ある特定の人物が、方言によりどのようなキャラクター造形をしているか、という問題が中心となっている。しかし、ある特定の人物に焦点を当てるだけでなく、それ以外の人物の方言使用にも目を向け、ドラマの全体を通じた方言使用の方針を明らかにすることも興味深い課題である。すなわち、発表者は、ドラマにおける方言使用の問題には、ある人物のキャラクターの造形に方言がどう関わるかという視点のほかに、作品全体の造形に方言がどのように関係しているかという視点も重要だと考える。このような、作品全体の方言の基調に関する問題は、人物のキャラクター造形という個別の問題の基盤にある問題であるともいえる。しかし、これまで、作品全体の方言を見渡すような研究はほとんどなく、そもそもドラマにはどのような方言がどのくらい使用されているかという実態を詳細に記述した研究も管見の限り見当たらない。本研究では、このように重要でありながら、これまで未検討であった問題の解明を目指すため、次のような調査を行なった。

¹ さとう みいな(東北大学大学院生) sato.miina.q6@dc.tohoku.ac.jp

3. 調査の方法

この研究のための調査では、ドラマ 1 作品中の、ある 1 地域の方言について、方言特徴がどのくらい出現するのかを計量的に検討した。

方言が出現するドラマは、舞台となる時代や地域、内容などが多岐にわたるが、今回は、NHK 連続テレビ小説『エール』(2020 年 3 月 30 日-11 月 27 日放送)を調査対象とした。『エール』は明治から昭和を生きた福島県出身の作曲家、古関裕而の生涯を題材とした作品であり、作中には福島市方言が使用されている。『エール』を調査対象とした具体的な理由に、舞台である時代(明治から昭和)が現実の伝統的な方言の記述が残っている時代とおおよそ合致すること、福島市方言は東北方言に属するため、制作者の東北方言に期待する意図が読み取れること、NHK 連続テレビ小説のシリーズは視聴率が安定して高いため、全国の多くの視聴者に影響を与えていると考えられること、過去 5 年以内に放送された作品であるため、現代の制作者が方言に期待する思いが読み取れそうであること、などがあげられる。

『エール』の中でも特に方言が多く出現する 13 話分(1 話 15 分×13 話=195 分)を優先的に選び出し、調査対象とした。

調査項目には以下に列挙したような、音韻 5 項目、文法 6 項目の計 11 項目を選び出した。選定にあたっては、福島市方言を概説的に説明した菅野(1967, 1982)、国立国語研究所(1974)、佐藤(1992)、白岩(2017)、幡(2005)、半沢(2018)を参照し、福島市方言を特徴づける方言要素を取り上げた。また大橋(2002)や『音韻総覧』など東北方言の音声の記載がある文献や、『日本言語地図』や『方言文法全国地図』など言語地図も適宜参照した。

- ・音韻(1)語頭のイ・エの統合/(2)シ・ス・シュ、チ・ツ・チュ、ジ・ズ・ジュの中舌化
(3)連母音アイ・アエの融合/(4)キの口蓋化/(5)語中語尾のカ行・タ行の有声化
- ・文法(6)形態/(7)格助詞「サ」/(8)接続助詞「ゲント」など/(9)助動詞「レル」
(10)終助詞「べ」/(11)終助詞「エ」

4. 『エール』における方言特徴の使用実態

本節では、11 の調査項目について、それぞれの調査項目がどのくらい『エール』に出現するか、その実数と割合を算出した結果を提示する。(割合はある方言特徴が出現する実数を、その方言特徴が出現しうる環境の全体の数で割ることで求めた。)なお、各項目に記した福島市方言の諸特徴は、先述の先行研究の記述に基づくものである。

(1) 語頭のイ・エの統合

福島市方言では語頭にあるイとエの区別がなく、両者の中間的な音声で実現される。この方言特徴の『エール』における出現率は、表 1 の通りである。語頭にイ・エがくる環境の 265 件のうち、イとエの区別がない例は 1 件もみられなかった。

表 1 語頭のイ・エの統合

語頭のイ・エ の統合	出現	実数(割合)
	あり	0(0)
なし	265(100)	

(2) シ・ス・シュ、チ・ツ・チュ、ジ・ズ・ジュの中舌化

福島市方言ではシ・ス・シュ、チ・ツ・チュ、ジ・ズ・ジュは、それぞれス、ツ、ズに近い中舌

母音で発音され、統合される。『エール』でこの方言特徴が出現していたのは表2の通り、出現しうる全体のわずか2%であった。その一例が「フグスイマ（福島）」、「ズィッカ（実家）」である。

(3) 連母音アイ・アエの融合

福島市方言では連母音アイ・アエが融合して広母音の「エアー」になる。これは「エー」とは区別されるのが伝統的であるが、発表者の耳には明確に「エアー」の発音と認められるものはなかった。そこで、「エー」となっているものを対象に調査したところ、『エール』におけるこの方言特徴の出現結果は表3のようになった。表3から、連母音の融合が起こりうる環境では、32%の割合で融合が起こることが分かる。『エール』で融合が起こっていた例は「ネー（否定「ない」）」、「オネゲー（お願い）」、「ケーッテ（帰って）」などであった。

(4) キの口蓋化

福島市方言では共通語のキに対応する音でしばしば口蓋化が起こり、たとえば、汽車は「チシャ」に近く聞こえる。この方言特徴の『エール』における出現率を、表4にまとめた。表4から、この方言特徴は全くみられなかったことが分かる。

(5) 語中語尾の力行・タ行の有声化

福島市方言では語中語尾の力行・タ行が有声化する。『エール』における有声化の出現率を表5にまとめた。起こりうる環境全体のうち、有声化が起こっていた割合は74%に及ぶ。この割合は、今回調査項目とした5つの音韻に関する方言特徴の中で最も多い。『エール』における具体的な例は「ワガレ（別れ）」、「ハヤグ（早く）」、「モジロン（勿論）」、「アイズ（あいつ）」などであった。

(6) 形態

(i) ル音の促音化・撥音化

福島市方言では、末尾がルで終わる動詞・助動詞は、ルが後接する語の語頭子音に応じて促音化または撥音化する。『エール』でのこの方言特徴の出現率は表6の通りである。全体に対し、83%という高い割合で方言特徴が出現している。具体的な例は、「アッカ（あるか）」、「フエット（増えると）」、「スンナ（するな）」、「トレンノガ（取れるのか）」などであった。

(ii) リ・レ音の撥音化と否定「ない」の口蓋化

福島市方言では、リおよびレ音に否定の「ない」が後接する場合、リ・レ音が撥音化することに加え、否定の「ない」が連母音の融合を起こし「ネー」になったものが、さらに口蓋

表2 シ・ス・シュ、チ・ツ・チュ、ジ・ズ・ジュの中舌化

シ・ス・シュ、 チ・ツ・チュ、 ジ・ズ・ジュの 中舌化	出現	実数(割合)
	あり	14(2)
	なし	550(98)

表3 連母音アイ・アエの融合

連母音アイ・ アエの融合	出現	実数(割合)
	あり	161(32)
	なし	350(68)

表4 キの口蓋化

キの口蓋化	出現	実数(割合)
	あり	0(0)
	なし	155(100)

表5 語中語尾の力行・タ行の有声化

語中語尾の 力行・タ行の 有声化	出現	実数(割合)
	あり	833(74)
	なし	289(26)

表6 ル音の促音化・撥音化

ル音の 促音化・ 撥音化	出現	実数(割合)
	あり	49(83)
	なし	10(17)

化し「ニー」となる。このような方言特徴の出現率を表7にまとめた。表7から、この方言特徴が出現していたのは1件（10%）のみであることが分かる。実際にみられた例は「ワスレランニー（忘れられない）」であった。

(iii) リ・レ音の促音化と「て・た」の口蓋化

福島市方言では、リ・レ音に「て・た」が後接すると、「ナガッチ（流れて）」「ナガッチャ（流れた）」のように促音化するとともに口蓋化も起こる。『エール』でこの変化が起こりうる環境のものを表8にまとめた。表8から、この特徴は全く出現していないことが分かる。

(7) 格助詞「サ」

福島市方言では、移動の目標、動作の帰着点、存在の場所、行為の目的を表す場合には、格助詞「サ」が用いられる。『エール』において格助詞「サ」が出現しうる環境全体をまとめたものが表9であり、出現率は61%と中程度である。また、その用法に注目すると、出現していた11件の内訳は、存在の場所が6件（「子供ノ ソバサ イダイ」）、移動の目標が5件（「トーキョーサ 行グンダ」）、動作の帰着点と行為の目的は0件と、用法ごとに出現数に差があったものの、用法は実際の福島市方言と合致し、逸脱はなかった。

(8) 接続助詞「ゲント」など

福島市方言には、共通語の「けれども」にあたる逆接の接続助詞として、「ゲント」「ゲンチョ」など複数の形式が使用される。この方言特徴の『エール』における出現率を表10に示す。表10から、この方言特徴は『エール』に全く出現していないことが分かる。

(9) 助動詞「レル」

可能の表現は、共通語の場合、五段活用の動詞では「書ける」「読める」のように可能動詞を持つが、福島市方言では「書カレル」「読マレル」のように助動詞「レル」を付けて表す。『エール』にみられた可能の表現を表11にまとめた。表11から読み取れるように、『エール』における五段活用の動詞の可能の表現は、すべて可能動詞を使用した形式で行なわれていた。

(10) 終助詞「べ」

福島市方言では、意志・勧誘・推量・確認要求の表現に終助詞「べ」が用いられる。『エール』にみられる「べ」が出現しうる環境全体を表12にまとめた。ここから、終助詞「べ」は半数程度（47%）出現していることが読み取れる。出現していた17件の意味に注目する

表7 リ・レ音の撥音化と否定「ない」の口蓋化

リ・レ音の撥音化と否定「ない」の口蓋化	出現	実数(割合)
	あり	1(10)
	なし	9(90)

表8 リ・レ音の促音化と「て・た」の口蓋化

リ・レ音の促音化と「て・た」の口蓋化	出現	実数(割合)
	あり	0(0)
	なし	42(100)

表9 格助詞「サ」

格助詞「サ」	出現	実数(割合)
	あり	11(61)
	なし	7(39)

表10 接続助詞「ゲント」など

接続助詞「ゲント」など	出現	実数(割合)
	あり	0(0)
	なし	17(100)

表11 助動詞「レル」

助動詞「レル」	出現	実数(割合)
	あり	0(0)
	なし	5(100)

と、確認要求が最も多く13件（「誕生祝イニ 買ッタモンダベ」）、次いで推量が3件（「貸シテクレッペ」）、勧誘が1件（「決着 ツケッペ」）、意志0件と、終助詞「ベ」の中でも、その意味によって出現数に偏りがあった。また、本来の用法から逸脱した誤用例は見受けられなかった。また、末尾がルで終わる動詞に「ベ」が接続する場合、ルが促音化するのに加え「ベ」は「ペ」となるが、この点に関しても誤用と思われる用例はみられなかった。

表 12 終助詞「ベ」

終助詞「ベ」	出現	実数(割合)
	あり	17(47)
なし	19(53)	

(11) 終助詞「エ」

福島市方言では、終助詞「エ」が他の終助詞に後接し「ナエ・ガエ・ワエ」などとなり、丁寧の意を表す。『エール』におけるこの終助詞の出現率を表13に示す。表13から、出現しうる全体に対し、終助詞「エ」はわずか2%にしか出現していないことが分かる。『エール』でみられた例には「暑グナリソーダナエ」、「アンダド 一緒ジャネガッタノガエ」などがあつた。

表 13 終助詞「エ」

終助詞「エ」	出現	実数(割合)
	あり	3(2)
なし	171(98)	

5. 方言特徴のまとめと制作者の意図

5.1. 方言特徴のまとめ

ここまで『エール』の方言特徴に関して、音韻5項目、文法6項目の計11つの項目を立てて検討した。その結果、各項目はすべて均一に『エール』に出現するのではなく、それぞれの方言特徴ごとに量的な差を伴って出現することが明らかになった。音韻について、出現率が高い順に方言特徴を並べると次のようになる。

語中語尾のカ行・タ行の有声化（74%）＞連母音アイ・アエの融合（32%）＞シ・ス・シユ、チ・ツ・チュ、ジ・ズ・ジュの中舌化（2%）＞語頭のイ・エの統合、キの口蓋化（0%）

文法の6項目についても、出現率が高い順に方言特徴を並べると、次のようになる。

ル音の促音化・撥音化（83%）＞格助詞「サ」（61%）＞終助詞「ベ」（47%）
 ＞リ・レ音の撥音化と否定「ない」の口蓋化（10%）＞終助詞「エ」（2%）
 ＞助動詞「レル」、接続助詞「ゲント」など、リ・レ音の促音化と「て・た」の口蓋化（0%）

以上のように、音韻と文法の両方で項目による出現率の差がみられた。このような結果は偶然でなく、その背景には、現実の方言からどのようなものを選び、どのように利用するかという制作者の意図が存在すると考えられる。

5.2. 方言特徴と制作者の意図

ここでは、そうした制作者の意図を先述の方言特徴の現れ方から探してみたい。なお、ここでいう「制作者」とは、脚本家、監督、演出家、制作統括、役者、方言指導者など、ドラマの制作に関わる人たちを総括する概念とする。それらの中の誰がどのようにドラマの方言特徴の出現に関与しているかは実態の把握が難しいため、現段階では保留としておく。

(1) 出現率に関する仮説

さて、あらかじめ仮説を述べれば、『エール』の方言特徴の出現率の高低は、次の3つの観点から説明ができるのではないかと考えられる。

A. 知名度が高くよく知られた方言特徴であるかどうか

→知名度の高い特徴は出現率が高く、そうでない特徴は出現率が低い。

B. 意味の理解に支障が出ない方言特徴であるかどうか

→支障が出ない特徴は出現率が高く、そうでない特徴は出現率が低い。

C. 役者が演技するのに容易な方言特徴であるかどうか

→難易度の低い特徴は出現率が高く、そうでない特徴は出現率が低い。

このうち、AとBは視聴者の受容に関する観点であり、Cは役者のパフォーマンスに関わる観点といえる。

(2) 音韻項目について

まず、音韻についてみていく。出現率の最も高い「語中語尾のカ行・タ行の有声化」は、ズーズー弁を特徴づけるよく知られた現象であり、福島市方言らしさを表現するには効果的な要素であるといえる。しかし、同じくズーズー弁の特徴として有名な「シ・ス・シュ、チ・ツ・チュ、ジ・ズ・ジュの中舌化」も、福島市方言らしさをアピールするにはうってつけの要素でありながら、出現率は低い。同じく知名度の高い要素であっても、出現率に違いが出たのはなぜだろうか。その理由は、意味の理解の面で、「語中語尾のカ行・タ行の有声化」はあまり支障をきたさないと考えられるのに対し、「シ・ス・シュ、チ・ツ・チュ、ジ・ズ・ジュの中舌化」は大いに誤解を生む可能性があるという点に求められそうである。すなわち、前者は同じ段・同じ行の発音で清濁が異なるものであるのに対し、後者はイ段とウ段のように発音の段がずれてしまうものである。前者に比べて後者の方が、共通語話者や他地域の人たちには言葉の取り違えや意味の不理解が生じる恐れが大きいのではないだろうか。

出現率の低い特徴には、「シ・ス・シュ、チ・ツ・チュ、ジ・ズ・ジュの中舌化」のほかに、「語頭のイ・エの統合」「キの口蓋化」もあるが、これらもイ段とエ段のように異なる段の統合に及ぶ現象であったり、カ行とタ行のように行の統合に関わる現象であったりする。これらもやはり視聴者の誤解につながる可能性が高い要素といえるだろう。加えて、「語頭のイ・エの統合」「キの口蓋化」は、「語中語尾のカ行・タ行の有声化」「シ・ス・シュ、チ・ツ・チュ、ジ・ズ・ジュの中舌化」ほど知名度が高くなく、福島市方言らしさを表現する効果はあまり期待できないと考えられる。

また、役者の立場から考えると、カ行・タ行の有声音は共通語にも存在するものであり、発音が容易であるのに対し、他の要素は発音が難しい。中舌母音やイ・エの中間音、キの口蓋摩擦音を正確に真似るのは難易度が高く、不十分な実演はかえって演技の効果を損ねてしまうことにもつながるだろう。

なお、もうひとつの音韻項目「連母音アイ・アエの融合」は一定程度の出現率を示している。この特徴は共通語（東京方言）でも位相的・文体的に現れることがあり、視聴者の理解を妨げることはなさそうである。発音も容易であり、役者も演技に困ることはあまりないだろう。ただしこの現象は福島市方言に限らず、全国に広くみられる音韻現象であるため、福島市方言らしさを表現するという点ではやや弱い要素であるかもしれない。その点が、「語中語尾のカ行・タ行の有声化」ほどの出現率を示さなかった理由ではないかと考えた。

(3) 文法項目について

まず、格助詞「サ」と終助詞「ベ」の出現率が5割、あるいはそれ以上に及ぶのは、これらが東北方言の特徴としてよく知られた要素であり、福島市方言らしさを表現するのに有効と判断されたからではないかと考えられる。視聴者の理解の妨げにもならず、役者のセリフとしても難易度は高くなさそうである。

一方、同じく助詞の終助詞「エ」や接続助詞「ゲント」などが低い出現率に留まっているのは、これらの特徴の知名度が「サ」や「ベ」に比べて高くないことが影響していると思われる。役者にとって、使用は難しくなさそうだが、知名度の低さが響いているのであろう。終助詞「エ」は使用したところで、丁寧のニュアンスが伝わるかという問題もある。 possible 助動詞「レル」は、知名度の低さのほか、受身との誤解の恐れがありそうである。

形態関係では、「ル音の促音化・撥音化」と、「リ・レ音の撥音化と否定「ない」の口蓋化」「リ・レ音の促音化と「て・た」の口蓋化」とで大きな差が出た。後者の2つは共通語にない現象であり福島市方言らしさを表現するには貴重だが、知名度が低いうえに視聴者の理解を妨げる可能性が高く、役者も覚えにくそうな要素である。そうした理由が、これらの要素の出現率を抑え込んだと考えられる。これに対して、「ル音の促音化・撥音化」、つまり、「アッカ(あるか)」「スンナ(するな)」という現象は、『日本方言大辞典』『音韻総覧』(p. 72)に、各地でみられる現象であると指摘されており、理解や実演が容易な要素であるといえる。福島市方言限定ではないものの、方言らしさを表現する点で重宝された可能性が高い。

(4) まとめ

以上、実際の方言特徴の現れ方を分析することで、ドラマにおける方言使用の実態とそこからうかがえる制作者の意図について考えてきた。ここまでの考察をまとめれば、次のようになる。

- ① ドラマの方言は、現実の方言がすべて反映されているのではなく、現実の方言から取捨選択されて利用されており、要素により出現率に違いが現れる。
- ② そこから読み取れる制作者の意図は、次のように考えることができる。: 知名度が高くよく知られた方言特徴を積極的に採用することで、その方言らしさを演出する。ただし、視聴者の理解に支障が出る要素や役者が実演するのに難しい要素は避ける。

(5) 制作者の発言から

制作者の意図を考察するにあたっては、NHK ドラマの制作者が方言について語ったシンポジウム資料である金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子編(2014)が参考になる。この資料で、NHK ドラマの制作統括の経験がある内藤氏と菓子氏が、「あくまでも方言はドラマの演出の一部である」(p. 88)、「全国放送のドラマは、方言をよく知る地元の人たちだけに向けて発信している訳ではないので、正確さとわかりやすさを両立しないといけない」(p. 88)と述べていることが記されており、注目される。

両氏のこの発言から、制作者はドラマにおける方言をドラマのストーリーを引き立てるための演出としてとらえていること、また、方言を使うことで視聴に不理解が生じてはいけないと考えていることが分かる。これらの点は、先述の②にまとめた制作者の意図にはほぼ合致するものであるといえるだろう。本発表はその点で、制作者の語る方言使用の方針を、実際のドラマのセリフを分析することで、実証的に明らかにしたということになる。

6. おわりに

本発表では、ドラマにおける方言使用の実態と制作者の意図について、『エール』を対象に調査・分析した。本発表に関連して、『エール』以外のドラマの方言の使用実態はどのようなものであるか、話者の位相や話者同士の関係、ドラマの場面の内容などによりみられる方言特徴に差はないか、今回ひとつの項目として扱った方言特徴でも、たとえば有声化では語中よりも語尾の有声化が起こりやすいなど、より詳細な観点における差はないか、など様々な視座からの検討ができそうである。これらの検討を深めることを今後の課題としたい。

参考文献

- 大橋純一(2002)『東北方言音声の研究』おうふう
- 菅野宏(1967)「第六章 言語生活」福島県文書広報課編『福島県史』24
- 菅野宏(1982)「12 福島県の方言」飯豊毅一他編『講座方言学 4—北海道・東北地方の方言—』国書刊行会
- 金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子編(2014)『ドラマと方言の新しい関係—『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ』笠間書院
- 熊谷滋子(2019)「フィクションが活用する方言イメージ—なぜ静岡方言は使用されにくいのか?」『ことば』40
- 国立国語研究所(1974)『言語使用の変遷 (1) —福島県北部地域の面接調査—』秀英出版
- 国立国語研究所編(1966-1974)『日本言語地図』全6巻, 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編(1989-2006)『方言文法全国地図』全6巻, 財務省印刷局
- 佐藤雄一(1992)「福島県の方言」『国文学 解釈と鑑賞』57(6)
- 尚学図書編(1989)『日本方言大辞典』小学館
- 白岩広行(2017)「福島方言簡易文法書」『福島県伊達市方言談話資料別冊 福島方言の記述にむけて』
- 田中ゆかり(2011)『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』岩波書店
- 中井幸比古(2019)「関西人はエセ関西弁を見破れるか?」『方言の研究』5
- 幡早夏(2005)「福島県方言に関する口語コーパスの収集とその分析」『言語情報学研究報告』8
- 半沢康(2018)「要地方言の活用体系記述 福島県福島市」小西いづみ編『全国方言文法辞典資料集(4) 活用体系(3)』方言文法研究会編

三重県における「お手玉」の呼び方の変異形の分布とその形成要因

櫻井 好基

1 はじめに

お手玉は、身近にある物で作れ、一人から数名、遊び方次第では大人数でも遊ぶことができ、また難易度の調整も自在な、当時の女兒が最も親しんだ遊びの一つである。

三重県におけるお手玉の呼び方のバリエーション（以下「変異形」と呼ぶ）は多様であり、過去に行われた多くの先行調査においても多くの語形が記録されている。

本発表では、変異形が当時のほぼ小学校区（以下「校区」と呼ぶ）を単位に分布したという旧鈴鹿郡域での発表者による先行調査結果を踏まえ、三重県全域でも同様な分布をしたのではないかという考えの下、調査を行い、校区単位で、固有の、最も使われた変異形の分布を明らかにするとともに、その資料をもとに分布形成に関わる要因を考察する。

2 研究方法

- ① 研究対象年代 1935（昭和10）年～1945（昭和20）年前後（以下「当時」と呼ぶ）
- ② 調査対象者 大正末～昭和10年代生まれの話者（約500の校区を単位に整理）
- ③ 調査方法（サンプル数） 対面聴き取り調査（約3400名（先行調査を含む））
- ④ 調査編集の視点 当時の校区での、固有の変異形、最も使われた（回答率概ね75%以上を目安とした）変異形は何か。
- ⑤ 調査全体像 次の二種の聴き取り調査からなる。
 - ア 子どもの遊びの呼び方等に関する調査（主調査）
 - ・ 子どもの遊び：お手玉、めんこ、じゃんけんの呼び方等
 - ・ その他：いばら餅の呼び方、子どもへの脅し言葉（「ガモジ」の使用等）
 - イ お手玉の呼び方の伝承等に関する調査（30名を対象とした調査）
 - ・ 伝承者：呼び方は（最初に）だれから聞いたか。母親、祖母等の出身地。
 - ・ 遊びの人数等：遊び場所（地元集落と学校）、そこで遊んだ人の属性・数
 - ・ その他の伝承関係事項：お手玉を（作り）与えた人、遊び歌等

3 変異形の分布状況等

(1) 変異形の分布概況等

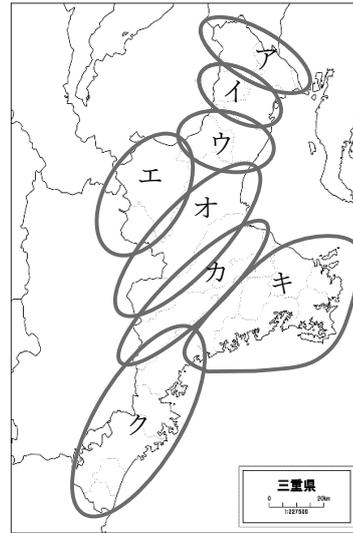
- ① 県内全域で、『日本言語地図』記録の22種を大きく上回る計147種という多様な変異形を確認した。
- ② ほぼ校区（又は数校区）を単位に多様な変異形が分布する傾向がみられた。
- ③ 人口が多い県内北部・中部地域及び伊勢志摩の漁村地域でより多様な変異形が分布した。
- ④ 滋賀県に隣接する地域において同県由来と考えられる変異形が分布した。
桑員地域（北部）、鈴亀・津地域（東海道・伊勢別街道沿い）、伊賀地域（北部）
- ⑤ 変異形の由来は多様であるが、遊び歌の一節に由来するものが多い。

(2) 地域別の変異形の分布状況 (校区単位を基本)

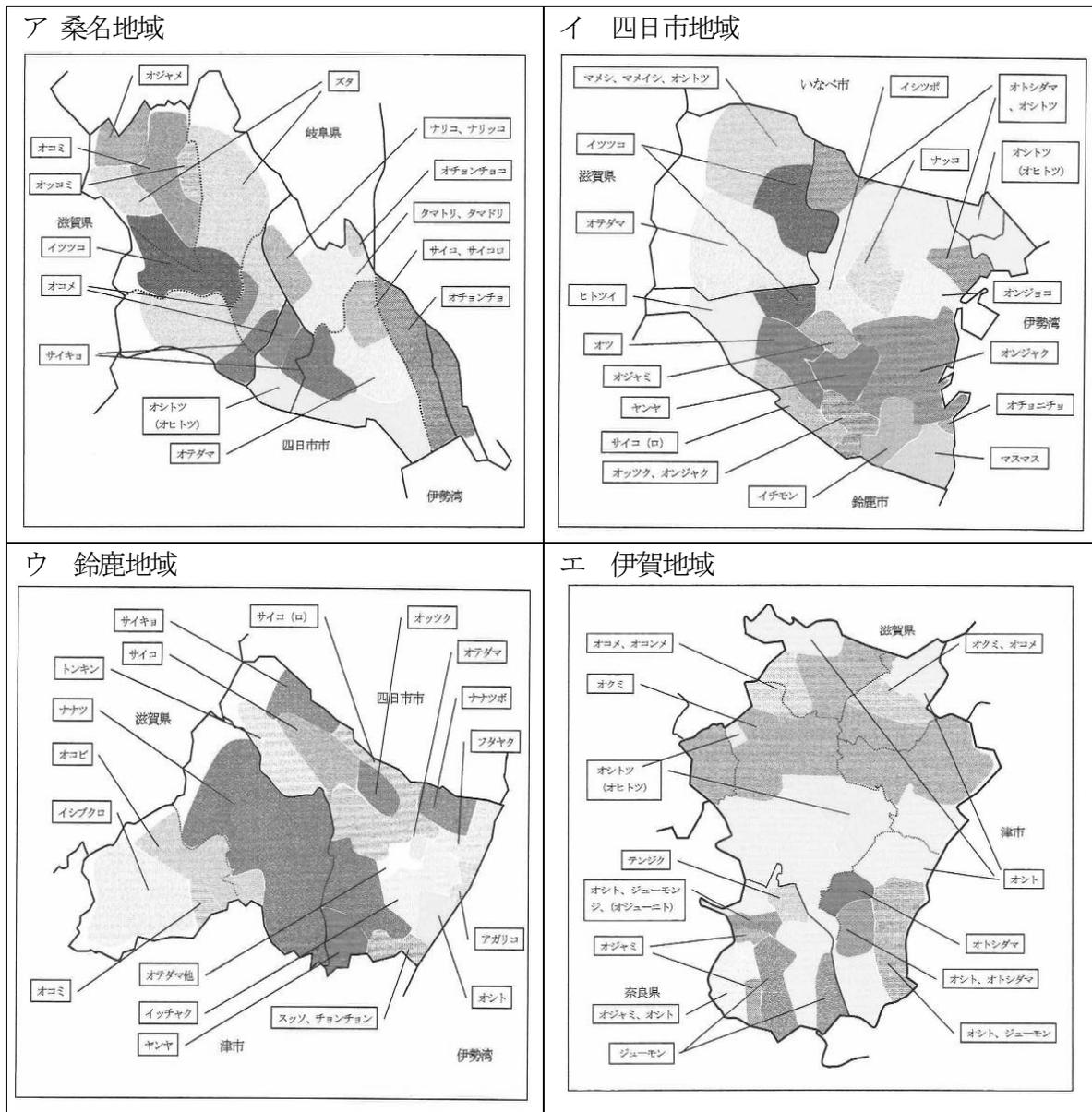
① 地域区分

ア	桑名地域	33種, 14区域
イ	四日市地域	28種, 18区域
ウ	鈴鹿地域	33種, 18区域
エ	伊賀地域	26種, 13区域
オ	津地域	40種, 20区域
カ	松阪地域	20種, 14区域
キ	伊勢志摩地域	27種, 17区域
ク	尾鷲熊野地域	16種, 9区域

※ 共通語「オテダマ」を各地域に含む



② 地域別の分布状況図



(3) 校区を単位とする分布の例外

ほぼ校区を単位とする変異形の分布に一致しない事例は次のとおり区分した。

- ① 主となる固有の変異形が分布する中で、隣接校区等の他の変異形や共通語が分布
- ② 一つの校区に2種の変異形が分布
 - ア 特定の集落のみ隣接校区の変異形が分布 (※校区他集落と離隔, 隣接校区と近接)
 - イ 本校区の一部と分校区で同じ変異形が分布 (※校区他集落と隔絶, 集落近接)
 - ウ 川で隔たれた特定の集落のみ異なる変異形が分布 (※大川による隔絶)
 - エ 二つの集落からなる校区で、集落ごとに異なる変異形が分布 (※完全分離)
 - オ 2種の固有の変異形が分布 (※半混交)
 - カ 隣接する二つの校区で使われる変異形が分布 (※混交)
- ③ 特定の集落のみ固有の変異形が分布 (※大きな離隔なし)
- ④ 校区に主となる変異形がなく、各集落で隣接校区の変異形が分布 (※校区中心部は広大な水田地帯で、集落は校区の縁に分布)

(4) 調査からみえた当時の動態的な変異形の変化

共通語「オテダマ」使用の広がりのほか、校区によっては大正時代頃に既に変異形が変化した所や、当時前後でも変化していた所がみられた。また、戦中頃から戦後にかけて、西日本に多い「オジャミ」の一時的な広がりが一部の地域でみられた。

校区 (例)	大正時代生	昭和5年頃生	昭和10年代生
笠田小 (いなべ市)	オコメ	オコメ	ズタ
加太小 (亀山市)	イシブクロ	イシブクロ	オジャミ
迫塩小 (志摩市)	オヒヒ	オテダマ	オテダマ
啓発小 (南伊勢町)	オヒヒ	オヒヒ	オジャミ
中立小 (御浜町)	イッカ	オジャミ	オジャミ

注：中立小の大正時代生は明治時代生を指す。

(5) 変異形の由来 (例)

変異形の由来は次のとおり多様であるが、遊び歌からのものが最も多い。

<ul style="list-style-type: none"> ・遊 び 歌： イッカ, イチモン, オサラ, オシト (ツ), オチョンチョ, オヒヒ, タンノシ, テンジク, トンキン, ドンツバキ, ナナツ, ニンガツ, フタヤク, マスマス ・内 容 物： イシナゴ・イシツボ・スナブクロ [砂・小石], オクミ・オコビ・オコメ [米], ズタ [数珠玉の実], マメギ・マメンチョ [豆類] ・使用個数： イツツコ ・音 関 係： ガチャガチャ, ナリコ ・似た形状： キンチャク, ザクロ, ホーズキ, オマンジュー ・遊び内容： オトシダマ, タマトリ ・不 明： オタダ, オンジャク, サイキョ, チキリン, ヒンニヤ, ヤンヤ

4 お手玉の呼び方の伝承等に関する調査結果

(1) お手玉をだれに (作って) もらったか

お手玉の作り手は、母親が最も多く、次に祖母という結果であった。ただ、当時は三世代同

居が一般的であり、祖母が健在な場合は多忙な母親に代わり祖母が作り与えの役割を担い、祖母がいない・できない場合に母親がその役割を担ったことが伺われた。

曾祖母	祖母	母	姉	友人	不明
1	8	14	4	2	1

※ 対象者 30 名

(2) 伝承者（誰から最初に聞いたか）

変異形の伝承者は、母親という回答が最も多く、祖母、姉と続き、伝承は家庭内が主であることを示した。家庭外では地元集落（以下「近所」と呼ぶ）の年上女兒が多かった。

(1)のお手玉の作り手と伝承者との関係は深く、変異形伝承の特色を示すようである。

曾祖母	祖母	母	姉	近所	学校
1	9	11	8	7	0

※ 家庭と地域で異なる変異形であった場合は複数回答

(3) 地域での変異形の変化

家庭内で伝承された変異形は、地域の言葉と異なる場合、そこでの遊びを通してそれに変わることが伺われたが、近所での変化の事例はみられた一方、学校での変化の事例や話は確認できなかった。

No.	家庭内伝承（伝承者）	近所の変異形	話者使用変異形	校区の変異形
1	サイキョ（祖母）	サイキョ	サイキョ	オツ
2	オジャメ（祖母）	ナナツ	ナナツ	ナナツ
3	オサライ（祖母）	ナナツ	ナナツ	ナナツ
4	オクミ（曾祖母）	オシト	オシト	オシト
5	オムスビ（母）	オムスビ	オムスビ	オシトツ
6	オジューニト（祖母）	オジューニト	オジューニト	オシト、ジューモン

(4) 狭い通婚圏

話者の祖母の世代及び母親の世代の出身地は、ともに同一集落が5割を越え、同一校区で約6割、同一変異形使用地域で見ると約7割と高く、昔は狭い通婚圏であったことを示した。

なお、関連し「在所（＝同一集落）片付く人は七つの徳がある」という諺を採録した。

出身地（%）	話者の祖母	話者の母	話者
同一集落（＝在所）	54%	53%	23%
同一校区	58%	60%	30%
同一変異形地域	69%	70%	57%

(5) 遊び場所（近所・学校）及び遊びの人数

お手玉遊びは近所では異年齢集団、学校では同年齢集団で行われ、ともに少人数が中心であったという結果であった。ただ近所では集落戸数が寡少、又は家が集落はずれの場合は遊ぶ機会は少なかったようである。学校でもよく遊ばれたようであるが、話者により回答が異なった。

場所	回答者	遊び相手
近所	ほぼ全女兒	異年齢女兒（年上、同年、年下女兒）数名
学校	約75%の女兒	同級生女兒 数名（人数が多くなると集団用の遊び方）

5 変異形の分布形成要因の考察

(1) 基本的な伝承と地域での分布形成要因

① 道具としてのお手玉の作り与えと世代間伝承の生起

お手玉は身近にある物で作られた遊び道具であり、当時、遊び始めの年齢になると家庭内で女兒に作り与えられ、併せて呼び方（変異形）、人によっては遊び歌や遊び方、作り方も伝承されたようである。他の遊びと異なり、遊び始めにそうした大人の手による道具の作り与えが行われたことが、変異形の家庭内での世代間伝承と深く関係したと考えられる。

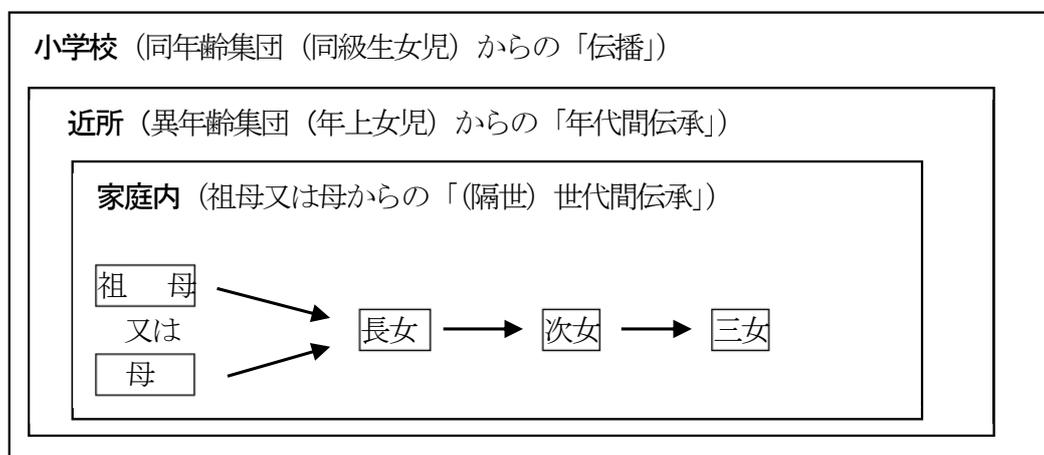
② 家庭内での「(隔世) 世代間伝承」(起点となる伝承)

当時は三世同居が一般的であり、祖母が健在な場合は祖母が道具の作り与えを行い、そうでない場合は母親がそれを行い、それとともに長女に変異形が伝承され、次女以降には先に伝承を受けた姉からそれが伝承されたようである。このように家庭内での祖母からの「隔世世代間伝承」がまずあり、それができない場合に母親からの「世代間伝承」が行われ、これらが変異形伝承の起点となっていたことが伺われた。

③ 近所や学校での遊びを通した変異形の変化（「維持」・「受容」）

当時、お手玉遊びは、近所では少人数の異年齢集団の中でなされ、家庭内で伝承された変異形は、そこでの遊びを通した「年代間伝承」の機能により、同じであれば「維持」され、異なればその言葉へ変化（「受容」の発生）した。小学校においては同年齢集団（同級生）による「伝播」の機能により、同様なことが起こったと考えられる。

このように遊びを通して、近所と学校の二段階で用語の維持・受容が起き、ほぼ校区を単位とした変異形の分布が形成されたと考えられるが、変異形の変化の状況を見ると、学校での変化の事例は確認できず、近所での「年代間伝承」の機能により形成された変異形は、学校での「伝播」のそれ以上に強い力を持ったものであったことが伺われた。ただ、これが一般的な力関係を示すものか、一般にない通婚圏等を背景とした例外なのかは不明である。



(2) 変異形の伝承・分布形成に影響を与えた他の要因

① お手玉（遊び）の性質

ア 遊び歌があること

各地域で様々な遊び歌が使われるとともに、多くの変異形はその歌の一節に由来した。

遊び歌がお手玉遊びに際し使用されたことが、地域・校区によっては変異形の伝承・形成において大きな意味を持ったと考えられる。

イ 一人でもできる遊び

お手玉は、他の遊びと異なり、家庭内で一人遊びができることから、当人の性格や遊びの

巧拙次第では家庭内で伝承された変異形の孤立分布の原因となったと考えられる。

② 昔の狭い通婚圏

ア 伝承者となった話者の祖母又は母親の世代は、通婚圏が近所や近隣等狭い地域であったことから、地域内で同一的な言葉になりやすく、また言葉の変化が起こりにくい環境であったことが伺われる。

イ 集落によっては特定の近隣地域と密接な通婚関係ができていたようであり、それが変異形の分布に影響したとみられる事例として次の所がある。

県内他地域でも集落毎に見ていけば同様な事例があるものと考えられる。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ 亀山市関町坂下地区： 80歳以上の女性の多くが、鈴鹿峠（県境）を越えた滋賀県甲賀市土山町等からの嫁入り → 坂下：「オコビ」、土山：「オコビシ」が分布・ 四日市市堂ヶ山町： 川を挟んだ旧鈴鹿郡久間田村・椿村との婚姻が多かった。 → 両地域に「サイキョ」、 「サイコ（ロ）」が分布（堂ヶ山の校区は「オツ」が主） |
|---|

③ 道路等の役割（を通じた人の往来）

変異形の分布には、道路等を通じた「伝播」と考えられる事例がみられた。

県内県境付近での滋賀県系の変異形の分布は、県境山道や旧東海道等を通じてのものと考えられる。また、伊勢地域は昔から京阪地域との関係が深かったことに加え、明治44年の参宮線開業に伴う直通列車の運行も「オジャミ」の分布に影響を与えた可能性が考えられる。

④ 都市部との交流

商工業が盛んな地域は仕入れ・販売で都市部との関係が深くなり、共通語や都市部の言葉の導入が進みやすい環境にあったことがその分布要因となりうると考えられる。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 桑名市街中心部： 「オテダマ」（※ 商業が盛ん）・ 四日市市川島地区： 「オジャミ」（※ 明治中期から紡績業が盛ん：人口 350 戸） |
|--|

⑤ 文化的優劣意識・人口の多寡

③で記述したように滋賀県に隣接した地域の一部には、滋賀県系の変異形の広がり認められた。三重県から見て滋賀の背後に京都があることから、当該地域からの情報は入りやすく、都市部からのしゃれた用語は地元の言葉にとって代わりやすいようでもあり、個々の聴き取りの中でもそうした話がみられた。（例：「ズタ」、 「イシブクロ」 → 「オジャミ」）

また、人口の多い地域で使われた変異形は、道路環境の改善や婚姻等に伴う人の移動によって周囲に影響を与える傾向も伺われた。

こうしたことには、（潜在的な）文化的優劣意識も関係したと考えられる。

⑥ 家庭内の諸状況

変異形は、「祖母から孫（長女）への隔世代間伝承」とそれを受けた「姉から妹への伝承」という基本となる家庭内伝承があり、そうでなかった家庭状況として次の事例がみられた。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ 祖母の早死・病气 → 母親からの伝承（世代間伝承）・ 年子の場合 → 姉妹で同時に伝承・ 稼業が多忙 → 近所の年上女兒から伝承（年代間伝承）・ 女兒の性格等（内向的、上手でない等） → 伝承された語形の孤立分布の可能性 |
|---|

⑦ 特殊要因としての太平洋戦争の影響

戦争の激化に伴う多くの都市児童の地方への疎開は、「オジャミ」、 「オテダマ」の広がりをもたらし、一部の校区で、昭和10年代前後の生まれは「オジャミ」への変化がみられた。

また、戦時中、学校によってはお手玉遊びが制限されたようであり、学校での「伝播」の機能による用語の使用に影響した可能性が考えられる。

(3) 分布形成要因のまとめ

お手玉の変異形の伝承・分布には、「お手玉の家庭内での作り与え」が深く関係したようである。当初の、家庭内伝承と地域での伝承とは多少時間的に前後することはあったかもしれないが、他の遊びと異なり、遊び始めに家庭内で祖母又は母親からのその作り与えとともに変異形の「(隔世) 世代間伝承」が行われ、その変異形は狭い通婚圏を背景とした近所での「年代間伝承」や学校での「伝播」により変異形の「維持」又はその「受容」がされていったとみられる。こうしたことに道路等の状況や文化的優劣意識等の他の要因が単独または複合して影響を与え、当時の分布が形成されていったものと考えられる。

6 最後に

本調査はまだ終了してはいないが、変異形の分布の大勢は変わらない。分布形成要因については、お手玉の作り与えとともに起こる家庭内での「(隔世) 世代間伝承」を含め、近所や学校での「維持」、「受容」、またそれに影響を与える要因について、調査結果等から考察した。

しかし、学校での「受容」についての具体的な事例は確認できず、分布調査で確認できた「ほぼ校区を単位とした変異形の分布」がどのように形成されたかは疑問が残る。過去の形成期に学校での遊びを通じた「伝播」とそれによる「受容」が働いた可能性とともに、先に示した当時以前の狭い通婚圏との関係も考えられ、それは本変異形のような地域差の大きい言葉にとり、少なくとも地域内での用語の統一化・固定化と一定の関係性があったものと考えられる。

なお、当時の子どもたちの言葉は、家庭内のほか、親戚を含めた集落・地域の人たちといった家庭外の「世代間伝承」、日常的な遊び集団である集落内の子どもたち間での「年代間伝承」、学校での同級生からの「伝播」という三つの伝承要因とともに、それに影響を及ぼす様々な要因が関係して形成されたと考えられ、同時に調査しためんこやじゃんけん、また調査済みの魚類、昆虫類等他の変異形の分布形成については今後の課題である。

※ 参考文献

天理大学方言研究会(1983)「奈良県と三重県の境界地帯方言地図」、天理・地域言語研究会(1998)「北勢地域に於ける方言の様相」、三重大学教育学部 余建(2013)「四日市市・内部川沿いの農業地域における言語表現の豊かさの解明と教材開発」、三重県立神戸高校必須クラブ方言研究会(1985)「鈴鹿市言語地図」、北岡四良(1956)「三重県方言資料集 志摩篇」、同(1958)「三重県方言資料集 伊賀篇」、同(1959)「三重県方言資料集 南勢篇上」、國學院大學方言研究会(1935)「方言誌 第50輯」、徳島大学総合科学部日本語研究室(2011)「三重県志摩市のことば」、大阪教育大学方言研究会(1979)「志摩・先島半島方言事象分布図集」、佐藤虎男(1998)「伊勢市とその周辺域の方言事象分布図」、三重県文学学会集(1992)「三重県方言 甲賀方言」、原口博幸(1999)「志摩町和具の方言と訛」、鍋島 泰(2008)「和具の方言1, 2, 3」、成城大学民俗学研究会(1981)「三重県北牟婁郡紀伊長島町島原字中桐 民俗調査報告書」、中野朝生(2000)「紀州北牟婁尾鷲のことば」、丹羽一彌、杉山代志子、鋤柄乃吏子(1980)「三重県南牟婁郡のことば」、江畑哲夫(1977)「南牟婁方言集」、同(2000)「三重県方言民俗語集成」、同(2001~2002)「三重県方言民俗語分布一覽(上, 中, 下, 続上, 続下)」, 三重県方言学会(1955~1992)「三重県方言 第1号~29号, 32号, 33号」、三重県内の69市町村誌

東京都のことばの年代差と地域差—新東京都言語地図—

久野 マリ子¹・竹内 はるか²・坂本 薫³

1 はじめに

『新東京都言語地図』は、1986年（昭61）に刊行された『東京都言語地図』（東京都教育委員会・大島一郎）に続く新しい東京都言語地図という意味で、新・東京都ではない。発表までの経緯については『新東京都言語地図 音韻』をご参照下さい。Ⅰ『新東京都言語地図 音韻』2018年（平30）<久野、竹内、坂本、石原、孫、福池、南、森越、川中子> Ⅱ『新東京都言語地図 アクセント』2019年（平31）<久野、竹内、坂本、孫、福池、石原、木野、川中子> Ⅲ『新東京都言語地図 文法・語彙』2022年（令4）<久野、竹内、坂本、孫、石原、川中子、久野>学振科研費C（課題番号：19K00651）「首都圏方言の古層の記述とその全国若年層への広がりに関する研究」の成果の一部である。

本発表では、それらから分かった東京都のことばの実態、年代差、地域差について一端を報告する。

【研究概略】大島一郎東京都立大学名誉教授のご研究による。1986年『東京都言語地図』が刊行され、その補完を目的として1989年に出発した。地点は伊豆諸島と東京都の周辺を加えて調査終了地点は89地点。調査項目は親項目が283項目。話者は東京都内調査地点生え抜きの男性で両親かもしくはどちらか一方がその地の生育で、本人もその地で生育した人。高年層77名と青年層49名。調査方法は面接聞き取り調査。

【結論】（1）多くの項目で年代差がある。新しい事象が青年層で認められる項目がある。（2）高年層では伝統的東京方言の形式を残しているが、青年層では共通語化が進んでいる。（3）年代差がない項目があった。（4）地域差が認められる項目があった。地域差の現れ方は調査分野で差がある。音韻は概ね対立する分布のある項目が少ない。アクセントでは23区対多摩地区の分布がある項目がある。文法では旧15区（東京市）対それ以外、35区（東京府）対多摩地区と周辺の県という対立がある項目があった。伊豆諸島は異なる方言区画に属するため違う特徴がある。文法で特色が目立つ。アクセントは三多摩地区やなやし方言との繋がりが認められる（八丈方言を除く）。音韻も特色がある。（5）全体的に高年層では豊富な方言の変種が認められる。

【話者の年齢と東京の広がり】

高年層話者は1912年（大2）～1926年（大15）生まれが中心で、旧35区時代の東京が言語形成期である。高年層は太平洋戦争前に言語形成期を終えていて学童疎開による共通語化は経験していない。青年層は1973年（昭和48年）前後の生まれが中心で、現在の東京都の姿になった時期が言語形成期である。高年層・青年層ともに調査時の年代設定で、高年層の話者は多くの方が90歳以上であ

¹ くの まりこ（國學院大學名誉教授）kuno@kokugakuin.ac.jp

² たけうち はるか（山梨学院大学学習・教育開発センター特任講師）takeuchi.haruka@c2c.ac.jp

³ さかもと かおる（國學院大學兼任講師）lukun84@icloud.com

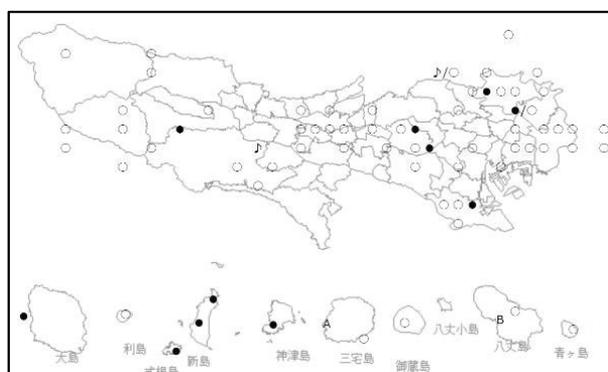
る。青年層の話者はほとんど 50 歳前後になっていて、ことば通りの意味での青年層ではない。

東京は江戸末期の旧東京 15 区から知られるように江戸の範囲はごく狭かった。1932 年(昭和 7 年)の 35 区時代の東京府の地図では、明治初期の東京市(旧 15 区)は旧 35 区より狭く、旧 35 区は現在の 23 区よりも狭い。その後、鉄道網の整備により通勤・通学圏が急速に拡大した。

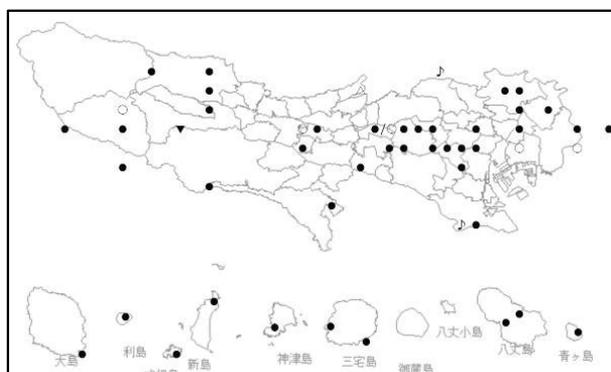
2 東京方言から共通語へ変化した項目

『新東京都言語地図』では東京方言の体系と新しい変化を求める調査項目が選ばれている。その中で、従来東京都内であまり調査がないが、共通語化や独自の変化を確認できる項目がある。本発表ではこの実態がわかる地図をいくつか取り上げる。

2.1 外来語の拍



地図 1 P.T.A (高年層)



地図 2 P.T.A (青年層)

記号	語形	高年層	青年層
●	ピーティーエー	11	42
▼	ピーティーアー	0	1
○	ピーテーエー	58	5
▽	ピーテーアー	1	0
△	ピーテーイー	0	1
♪	ピーチーエー	2	2
A	ピーテーイーエー	1	0
B	ピーティエイ	1	0

外来語については「ティ/ディ」「ファ/フィ/フェ/フォ」についての調査がなされている。具体的な調査項目は「P.T.A」「ディズニーランド」「ファン」「フィルム」「フェリー」「フォーク」である。この項目では、従来日本語の音声になかった外来語の拍の音韻を青年層が獲得していることが確認できる。ただし現れ方は項目(拍や語)により違いがある。

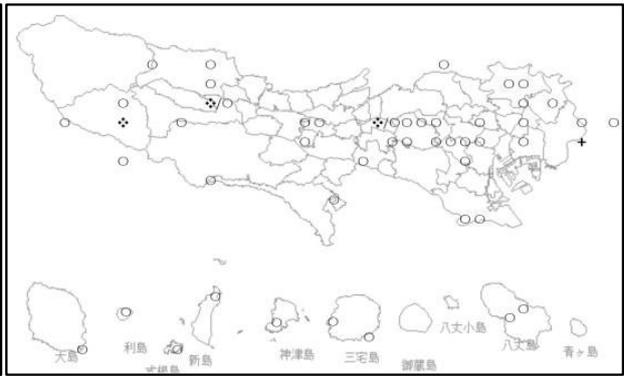
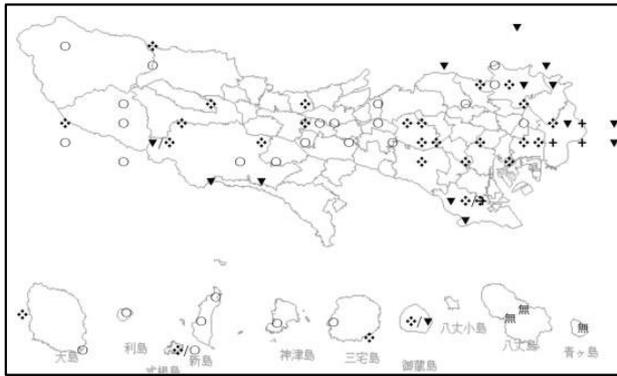
具体的な結果としては、地図 1 において、高年層ではピーテーエー(○)で観察される地点が 58 地点で最も多かったのに対し、青年層ではピーティーエー(●)が 42 地点で最も多くなっている。

同様の傾向が見られる中でも「フィルム」に関しては、青年層において従来の日本語の音声になかった「フィ」と回答した地点が他の項目と比べると少なくなっている。地図 1・2 で示した「ティ」について、青年層では「ティ」と発音する地点が 43 地点、「ティ」と発音しない地点が 8 地点であるの対し、「フィ」については、青年層において「フィ」と発音する地点が 38 地点、「フィ」と発音しない地点は 19 地点となっている。「フィ」が他の拍ほど青年層で定着していないのは、尾崎(2016)と同様の結果となっている。

2.2 名詞のアクセント

名詞アクセントの項目では、単独、助詞の「が」と「の」が付いた文が調査されている。類別語彙表にある名詞のアクセントは拍数が短いものは安定性が高くなっており、伝統的な東京アクセントで観察される。しかし、拍数が長くなると変種が多くなり、中にはアクセント辞典に記載のない型が優勢となっている地図もみられる。本発表では世代差が確認できる3拍の名詞「親父」を取り上げる。

「親父」は、山田美妙（1892）『日本大辞書』に第一上、秋永一枝編（2014）『新明解日本語アクセント辞典』に伝統的に[オ]ヤジ、新しい型がオ[ヤジと記載されているように、東京方言では頭高型として知られる項目である。



地図3 「親父が」のアクセント（高年層）

地図4 「親父が」のアクセント（青年層）

記号	語形	高年層	青年層
○	オ[ヤジガ	26	46
+	オ[ヤジ]ガ	4	1
▼	オ[ヤ]ジガ	14	0
◆	[オ]ヤジガ	28	3
無	無アクセント	3	0

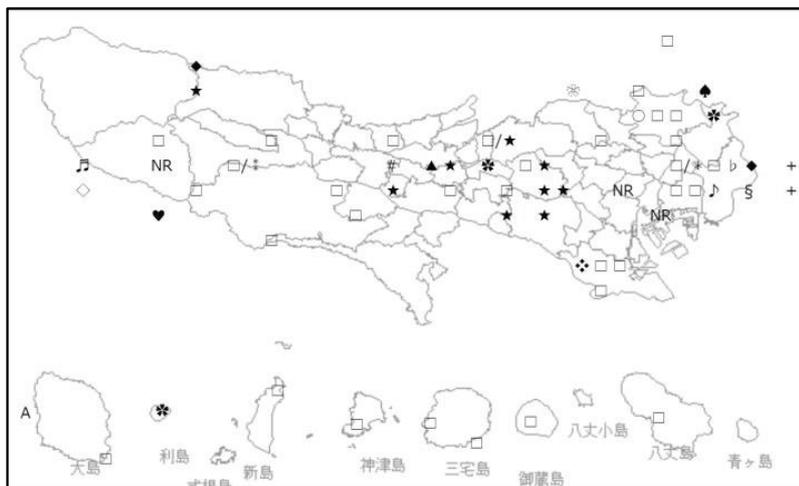
しかし、地図3・4をみると青年層では高年層で優勢であった頭高型(◆)はほぼ確認できず、ほぼ平板型(○)のみになっている。このように「親父」のアクセントからは、都内において東京方言から共通語への変化が進むことが確認できる。同じく東京方言で頭高型への変化として知られる「電車」も同様の傾向が確認できる。こ

の項目は『東京都言語地図』にはない項目で東京都内の新たなアクセント変化の様相を確認するために新たに追加した項目である。

2.3 「くわがた虫」と「かぶと虫」

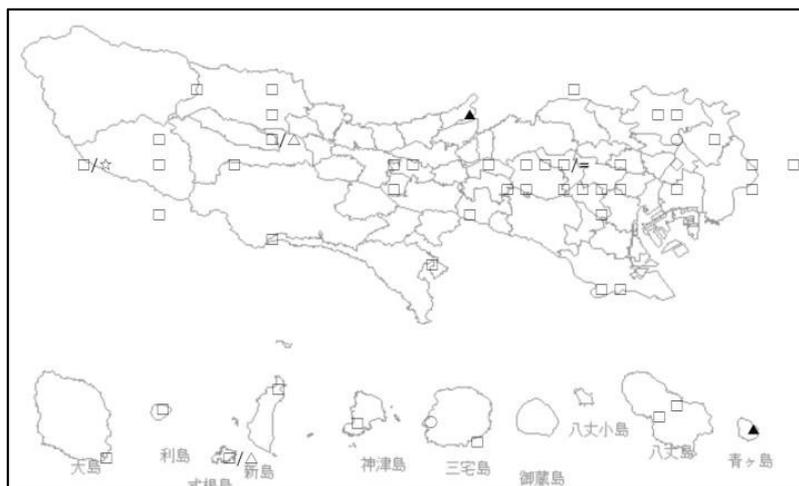
『新東京都言語地図』においては「かぶと虫」「くわがた虫」の項目で「セーカチ」という語形の同音衝突が問題となる。東條操編『全国方言辞典』（1951）や『日本方言大辞典』（1989）によると「さいかちむし」として江戸や埼玉県、「さいかち」として千葉県、東京都八王子で使用されていることが記載されている。結果をみると「かぶと虫」（地図省略）の項目では高年層において「セーカチ」が14地点、「サイカチ」が17地点となっており、東京では伝統的に「サイカチ系」が使用されていることがわかる。しかし、「くわがた虫」の項目においては高年層において「セーカチ」が1地点、「サイカチ」が2地点である。「くわがた虫」の項目は、豊富な俚言形が観察される。高年層において観察される語形は地図5・6のとおりである。しかし、高年層では多様な語形が観察されているのに対

し、青年層ではほぼ「クワガタ」のみが分布するという結果になっている。このように、語彙項目では伝統的方言の言語生活から共通語化が急速に進んでいることが確認できる項目が多い。



地図5 くわがた虫 (高年層)

記号	語形	高年層	青年層
○	クワガタムシ	1	2
□	クワガタ	32	45
◇	クアガタ	1	1
△	クワ	0	2
❖	セーカチ	1	0
◆	サイカチ	2	0
▲	カミキリムシ	1	2
★	カミキリ	9	0
✱	ハサミムシ	3	0
✳	ハサミ	1	0
+	ゼニバサミ	2	0
=	ノコギリムシ	0	1
#	キリキリムシ	1	0
§	キツキリムシ	1	0
♥	オニムシ	1	0
♠	ナンバンムシ	1	0
b	クツワ	1	0
♪	タケダ	1	0
♪	キジ	1	0
☆	カジバラ	0	1
*	カブトムシ	1	0
*	カブト	1	0
A	ゲンジ	1	0
NR	NR	3	0



地図6 くわがた虫 (青年層)

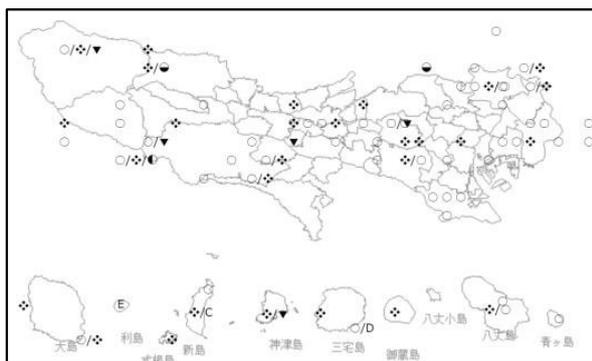
3 東京の伝統的方言の姿が残されている項目

「蹴る」「しゃべる」の命令形について、現在ではこれらの動詞はラ行五段活用として教科書などに示されるように、共通語の命令形としては「蹴れ」「しゃべれ」が学習される。また、『方言文法全国地図』第2集第89図によると、西部に「ケレ」、東部に「ケロ」が分布する東西対立が見られる項目となっている。中田(1986)『東京都言語地図』の文法の解説にあるように、「蹴る」は江戸時代に活用の種類が一段活用から変化したこと、「しゃべる」は終止形が「食べる」など一段動詞と同じになることなどが原因であると考えられている。この2項

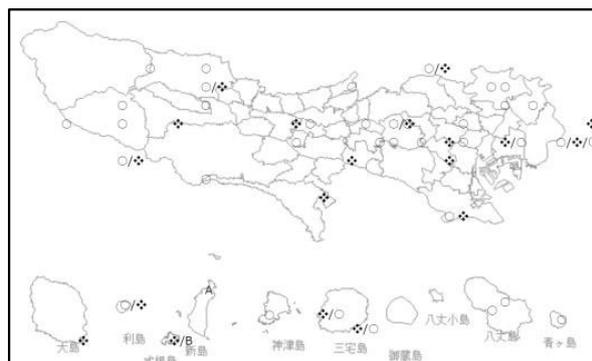
記号	語形	高年層	青年層
○	ケレ	50	36
❖	ケロ	28	19
●	ケー	1	0
●	ケトバセ	2	0
▼	ケットバセ	5	0
◆	ケツパレ	0	1
●	ケツバクレ	0	1
A	ケイ	0	1
B	ケウ	0	1
C	ケツバカシ	1	0
D	キツバセ	1	0
E	ケリヤイ	1	0

目は『東京都言語地図』にも調査があり、いずれも高年層から青年層にかけて共通語形で話す地点が増えるという傾向は変わらない。しかし、着目したいのは青年層においても共通語形でない語形が一定の勢力を保持している点である。地図 8 に見られるように、「蹴る」の命令形について青年層ではケレ (○) が 36 地点と最も優勢であるが、ケロ (◆) も 19 地点、分布域には全域にわたっている。

日常会話で地元の方言形を使用する話者は、共通語の活用形は学習して習得する。そのため、共通語形が「ケレ」か「ケロ」か迷うことはない。しかし、首都圏の話者は自身が普段話していることが共通語であると意識が強いこともあり、自身が話す「ケロ」が共通語の活用形と異なることに気づかなかったという首都圏話者の内省も多く聞かれる。



地図 7 蹴れ (高年層)



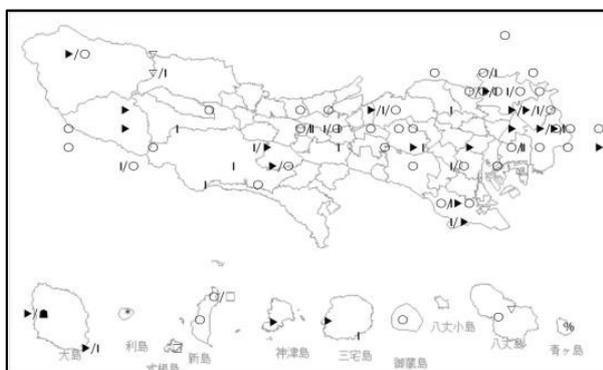
地図 8 蹴れ (青年層)

4 東京方言の特徴として知られている伝統的な項目

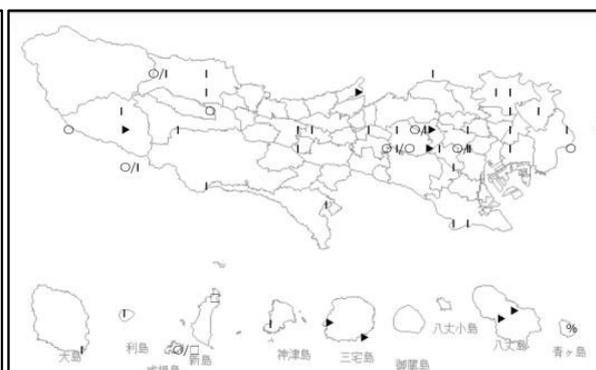
本節では『新東京都言語地図』の分布図より、特に東京方言の特徴として知られている伝統的な項目に関わる項目を取り上げる。本発表ではその中から特に年代差や地域差が現れる項目を示す。

4.1 連母音の融合とアエ→アイの変化

連母音の融合に関する項目は『東京都言語地図』にも「大工」「大根」など、ai 連母音が採用されていた。『新東京都言語地図』では ai だけでなく、「帰る」(ae,ai)、「消える」(ie)、「寒い」(ui)、「面白い」(oi)、覚える (oe) の 6 種の連母音について調査している。本発表では「帰る」について取り上げる。



地図 9 帰る (高年層)



地図 10 帰る (青年層)

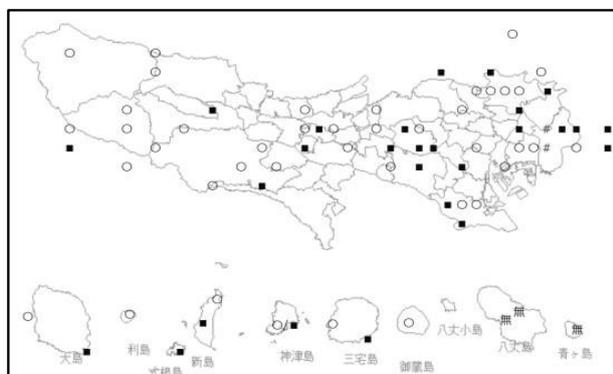
高年層では連母音が融合した「ケール」が勢力を持ち、23区から多摩、島嶼部まで広く分布している。着目すべきは第3の勢力の「カイル」で、分布はないがあちこちに見られる。調査当時の東京都では「帰る」について「カエル」と「カイル」の二つの非融合形が存在していた。このエーイの変化については「旧市域の訛語」として齋藤 1935（「アタリマイ」「オムカイ」「カイル（帰る）」「ハイ」など）に指摘があり、田中 1983 では「下町ことば」として「オマイサン」「カンガイル」「カイル（蛙）」「マチガイル」と例が挙げられている。地図上「カエル」・「ケール」の併用を示す地点と「カイル」・「ケール」の併用を示す地点があることから、融合形「ケール」は「アエ」・「アイ」両方の融合形であるといえる。なお、青年層では「カイル」は少数（8地点）残るものの「カエル」が優勢になる。

記号	語形	高	青
┆	カエル	27	34
▶	カイル	21	8
■	カイン	1	0
○	ケール	42	10
□	ケーウ	2	2
▽	キャール	3	0
%	モドロフ	1	1
*	イク	1	0

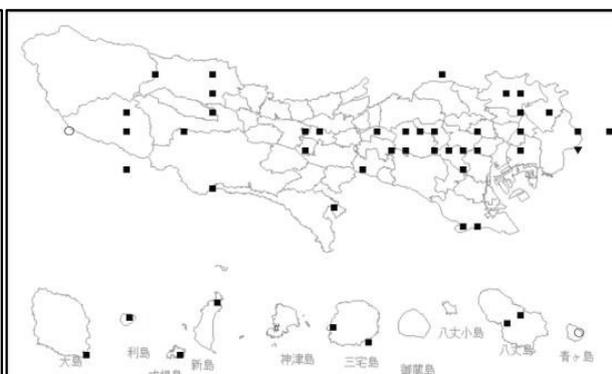
4.2 動詞ナガラ形のアクセント

『新東京都言語地図 アクセント』では各動詞の動詞について終止形と、タ形・ナイ形・丁寧形・ナガラ後接形・命令形の五つの活用形について調査している。「望む」の連用形に後続語「ながら」が接続した形式である。共通語のアクセントでは平板型の動詞には「ながら」は「ノ[ゾミナガラ]」のようにそのまま高くついて下がり目を生じないと言われているが、その規則性に揺れが生じている報告がある（辰浜 1975, 清水めぐみ 2001, 那須・栗木 2015, 郡 2020, 那須・今田・菅野 2022）。高年層の分布図を見ると下がり目のない平板型が優勢だがそれに続く勢力として「ナ」の後で下がる「ノ[ゾミナ]ガラ」というアクセントがある。特に23区と島嶼部に目立つ。このアクセントは「起こす」「分かる」のような起伏型の動詞に「ながら」が接続した形式のアクセントと同じであり、「ながら」接続形のアクセントに起伏型への統合の傾向が見られることを示している。青年層になるとその傾向は一層顕著になり、起伏型と同じ「ノ[ゾミナ]ガラ」が圧倒的に優勢になる。なお、[g]と[ŋ]はガ行で示す。

記号	語形	高	青
○	ノ[ゾミナガラ]	41	2
#	ノ[ゾミナガラ]	2	1
■	ノ[ゾミナ]ガラ	27	45
▼	ノ[ソ]ミナガラ	0	1
無	無アクセント	3	0



地図 11 望みなガラ（高年層）

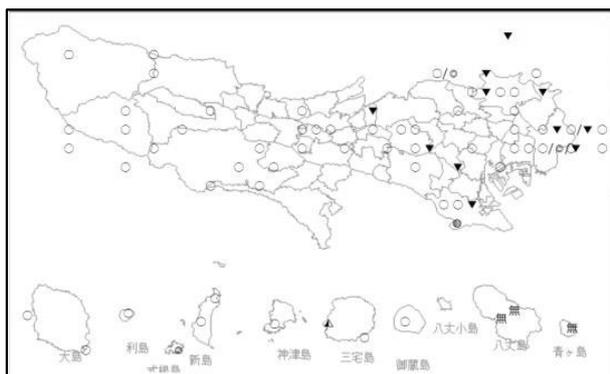


地図 12 望みなガラ（青年層）

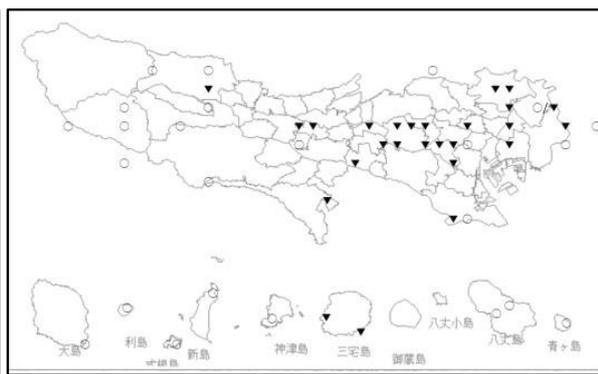
4.3 形容詞の型の対立

「赤い」「甘い」などの形容詞（類別語彙Ⅰ類）は東京の伝統的なアクセントでは下がり目のない平板型のアクセントで「白い」「辛い（からい）」などの起伏型（類別語彙Ⅱ類）の形容詞と対立があるとされるが、終止形のアクセントには起伏型への統合が指摘されている（秋永 1957, 稲垣 1986, 平山 1969, 馬瀬・佐藤 1989 など）。また、東京の周辺地域には対立が保持されている地域があることも知られている。高年層

記号	語形	高	青
○	ア[マイ]	56	24
◎	ア[メー]	3	0
▲	[アマ]イ	1	0
▼	ア[マ]イ	11	26
無	無アクセント	3	0
⊙	アマ[イ]	1	0



地図 13 甘い（高年層）

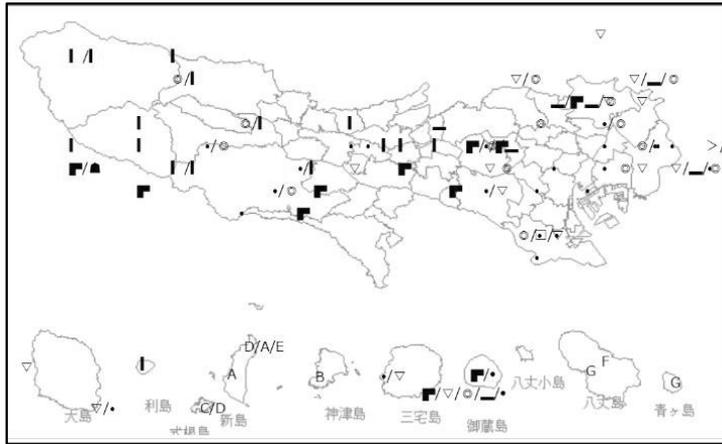


地図 14 甘い（青年層）

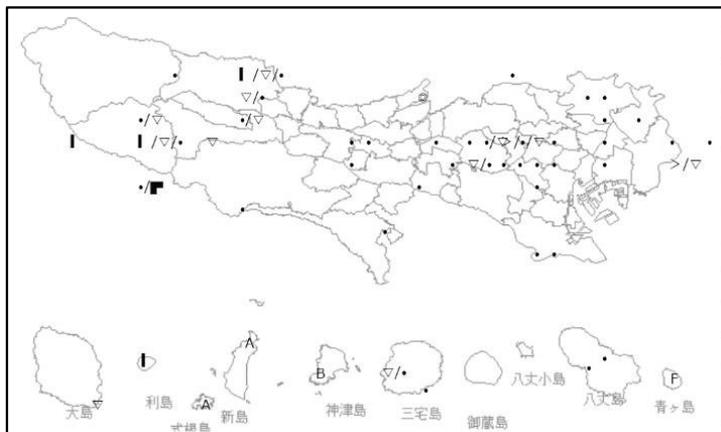
の「甘い」の分布図を見ると、23区で起伏型の「ア[マ]イ」が散在しているものの下がり目のない「ア[マイ]」が優勢で、平板型のアクセントが保たれていたことがわかる。ところが、青年層の分布図を見ると、23区を中心に起伏型の「ア[マ]イ」が勢力を増し、地点数の上では平板型を上回っている。調査時点の東京都は23区を中心に3拍形容詞の終止形の型の統合が23区の方面から進み始めていると読み取れる。

4.4 カ変動詞の意志形「来よう」

カ変動詞「来る」の意志形は、高年層では後続形式に対し、「キ」「ク」「コ」のどの活用形が接続するかという点で特色がみられる。最も回答が多かったのは「コヨー」で、主に23区（旧15区）にまとまっている。それを取り囲むように「キ」に「ヨー」が接続した「キヨー」が見られる。「キヨー」は23区周辺部から奥多摩まで広く分布している。「ベー」が接続した形式は「クルベー」、「コベー」、「キベー」、「クベー」とバリエーションがある。23区に主に見られるのが終止形に接続した「クルベー」で、多摩地域では「クベー」がまとまって分布している。「コベー」は地域的なまとまりはないが東西に広く散在し、「キベー」は23区の北寄りの地域や千葉県に回答が見られる。青年層になると状況は一変し、「コヨー」が圧倒的な勢力を持つ。「ベー」接続形式では「クルベー」が最も回答数が多く、主に奥多摩にまとまっている。



地図 15 来よう（高年層）



地図 16 来よう（青年層）

記号	語形	高	青
●	コヨー	25	40
◎	キヨー	16	1
■	クルダン ベー	2	0
□	クルダベー	1	0
▽	クルバー	16	12
>	クルッペ	1	2
□	コベー	11	1
—	キベー	7	0
	クベー	15	4
A	クルビー	2	2
B	クルパー	1	1
C	クビー	1	0
D	コビー	2	0
E	クロー	1	0
F	クログアン	1	1
G	クログン	2	0

参考文献

尾崎喜光 (2016) 「全国多人数調査から見る外来語音の現状と動態」『ノートルダム清心女子大学紀要』40 巻 1 号。

金田一春彦監 秋永一枝編 (2014) 『新明解日本語アクセント辞典 第2版 CD付き』三省堂。久野マリ子・久野眞・竹内はるか・坂本薫・川中子善子・石原郁子 (2022) 「特集 東京のことばの移り変わり」『多摩のあゆみ』第 185 号 たましん地域文化財団。郡 史郎 (2020) 「日本語の助詞・助動詞類のアクセント：一覧と使い分け、変化の方向性」『言語文化共同研究プロジェクト』。国立国語研究所 (1989-2006) 『方言文法全国地図』。斎藤秀一 (1935) 「旧市域の訛語」『東京方言集』(復刊版 国書刊行会 1976)。佐藤亮一編 (1989) 『日本方言大辞典』小学館。清水めぐみ (2001) 「東京語の助詞のアクセント」『国語研究』64。辰浜マリ子 (1975) 「伊豆新島若郷方言における動詞活用形のアクセント」『都大論究』第 12 号 東京都立大学国語国文学会。田中章夫 (1983) 『東京語—その成立と展開—』明治書院・東京都教育委員会 (1986) 『東京都言語地図』東京都教育委員会。東條操編 (1951) 『全国方言辞典』東京堂。那須昭夫・栗木風香 (2015) 「若年話者に生じつつある付属語アクセントの変化—ナガラ節での起伏化傾向—」『第 29 回日本音声学全国大会予稿集』。那須昭夫・今田水穂・菅野倫匡 (2022) 「平板ナガラ節の起伏化に見る地域的多様性」『第 36 回日本音声学全国大会予稿集』。三樹陽介 (2014) 『首都圏方言アクセントの基礎的研究』おうふう。山田美妙編 (1893) 『日本大辞書』日本大辞書発行所。

《方言関係新刊書目》(114号につづく)

国立国語研究所研究図書室が2022年4月以降に受け入れた図書の中から、2014年以降の刊行物を選びました。なお、同図書室目録に未記載の文献でも、内容を確認したものは掲載しました。

お気づきの点は、日本方言研究会事務局

〒654-8585 神戸市須磨区東須磨青山2-1 神戸女子大学文学部日本語日本文学科 気付

hougen-jim@e-mail.jp

までお知らせください。

▼Verben, Adjektive, Zeit und Zahlen

von Peter Behnstedt und Manfred Woidich, mit Beiträgen von Mahasin Abu Mansur ... [et al.], Leiden : Brill, xvi+863p.+maps (some col.)-25×31cm. 2014(H26)年04月

▼移動とことば

川上郁雄, 三宅和子, 岩崎典子編, くろしお出版, iii+297p+挿図-21cm. 2018(H30)年08月

▼会いたっちゃ：宮城県名取市の方言書簡集

榎引祐希子, 方言を語り残そう会 [編], 東北大学方言研究センター, 51p-26cm. 2021(R03)年03月

▼ナーナイ語諸方言の研究3 (ツングース言語文化論集68)

風間伸次郎編著, 東京外国語大学, i+225p-26cm. 2021(R03)年03月

▼被災地方言の保存・継承のための方言会話の記録と公開4

東北大学方言研究センター編, 東北大学大学院文学研究科国語学研究室, 93p-30cm. 2021(R03)年03月

▼Funktionswörter, Adverbien, Phraseologisches: eine Auswahl

von Peter Behnstedt und Manfred Woidich, mit Beiträgen von Mahasin Abu Mansur ... [et al.], Leiden : Brill, xiv+567p.+col.+maps-25x31cm. 2021(R03)年08月

▼馬事・馬術用語事典

手塚光磨編著, 揺籃社, ii+595p-26cm. 2021(R03)年09月

▼Building a national corpus : a Welsh language case study

Dawn Knight ... [et al.], Cham : Palgrave Macmillan, v+183p.+ill.-22cm. 2021(R03)年10月

▼Perspectives on the Japanese media and content policies

Minoru Sugaya, editor, Singapore : Springer, xvi+278+2p.+ill. (some col.)-24cm. 2021(R03)年11月

▼The linguistics wars : Chomsky, Lakoff, and the battle over deep structure(2nd ed)

Randy Allen Harris, New York : Oxford University Press, xvi+547p.+ill.-24cm. 2021(R03)年11月

▼Corpus linguistics for English for academic purposes

Vander Viana and Aisling O'Boyle, Abingdon, Oxon : Routledge, [xv]+260p.+ill.-24cm.

2021 (R03) 年 12 月

▼カンナマルクールの神 (みる・よむ・きく南の島ことば絵本：多良間島)

野原正子伝承, 山本史絵, 下地賀代子ことばの解説, 藤田 Round 幸世, Rick Round 英訳, ひつじ書房,
32p-31cm. 2021 (R03) 年 12 月

▼星砂の話 (みる・よむ・きく南の島ことば絵本：竹富島)

内盛スミ伝承, 山本史絵, 中川奈津子ことばの解説, 藤田 Round 幸世, Rick Round 英訳, ひつじ書房,
32p-31cm. 2021 (R03) 年 12 月

▼Exploring the self, subjectivity, and character across Japanese and translation texts

by Senko K. Maynard, Leiden : Brill, x+296p.-25cm. 2022 (R04) 年 01 月

▼Field guide to intercultural research

edited by David S.A. Guttormsen, Jakob Lauring, Malcolm Chapman, Cheltenham : Edward Elgar
Publishing, xxxi+359p.+ill.-24cm. 2022 (R04) 年 01 月

▼Hokkaido : a history of Japan's Northern Isle and its people

Ibrahim Jalal, Hong Kong : Earnshaw Books, [xiv]+296p.+ill.-22cm. 2022 (R04) 年 01 月

▼インタビュー調査法の基礎：ロングインタビューの理論と実践

グラント・マクラッケン著, 寺崎新一郎訳, 千倉書房, xiv+206p+挿図-19cm. 2022 (R04) 年 01 月

▼漢字の音：中国から日本、古代から現代へ (東方選書 57)

落合淳思著, 東方書店, iii+239p+挿図-19cm. 2022 (R04) 年 01 月

▼塩一升の運 (みる・よむ・きく南の島ことば絵本：沖永良部島)

松村雪枝, 田中美保子再話, 山本史絵, 横山晶子ことばの解説, 藤田 Round 幸世, Rick Round 英訳, ひ
つじ書房, 36p+挿図-31cm. 2022 (R04) 年 01 月

▼地理语言学视域下梅州客家方言语音研究

李菲著, 广州 : 中山大学出版社, 2+3+8+250p+挿図-24cm. 2022 (R04) 年 01 月

▼AI が会話できないのはなぜか：コモングラウンドがひらく未来

西田豊明著, 晶文社, 405p-19cm. 2022 (R04) 年 02 月

▼エウエン語アルカ方言の研究 (ツングース言語文化論集 69)

風間伸次郎採録・訳注, 東京外国語大学, ii+254p+挿図-26cm. 2022 (R04) 年 02 月

▼外国につながる人々の社会参加と言語管理 (千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告
書 : 第 366 集)

村岡英裕編, 千葉大学大学院人文公共学府, 131p+挿図-30cm. 2022 (R04) 年 02 月

▼語(かだ)るびゃ・語(かだ)るべし青森県の方言報告書 2021

今村かほる編, 弘前学院大学文学部今村かほる, 90p+挿図-30cm+DVD2 枚. 2022 (R04) 年 02 月

▼言語景観から考える日本の言語環境：方言・多言語・日本語教育

ダニエル・ロング, 斎藤敬太著, 春風社, 400p-22cm. 2022 (R04) 年 02 月

▼言語研究の世界：生成文法からのアプローチ

杉崎鉦司, 稲田俊一郎, 磯部美和編, 研究社, v+357p-21cm. 2022 (R04) 年 02 月

- ▼多言語教育に揺れる近代日本：「一外国語主義」浸透の歴史
下絵津子著，東信堂，x+248p+挿図-22cm. 2022 (R04)年 02 月
- ▼地域紹介番組「くろーず UP せとうち」のインタビュー場面完全文字化資料：岡山県・香川県在住者を中心とするのべ 455 人の 1980 年代の話し言葉
尾崎喜光編著，尾崎喜光，114p-30cm. 2022 (R04)年 02 月
- ▼地名と歴史から探る江戸 (MdN 新書 033)
古川愛哲著，エムディエヌコーポレーション，インプレス（発売），223p+挿図-18cm. 2022 (R04)年 02 月
- ▼方言と生きている：信州諏訪北山浦方面：方言かるた絵本・方言集収録
上原佳月著，文藝出版，175p+挿図-21cm. 2022 (R04)年 02 月
- ▼方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承（令和 3（2021）年度文化庁委託事業報告書 4）
杉本妙子編著，[茨城大学人文社会科学部]，83p-30cm+CD2 枚. 2022 (R04)年 02 月
- ▼Natural language processing for corpus linguistics
Jonathan Dunn, Cambridge : Cambridge University Press, 84 p.+col. ill.-23cm. 2022 (R04)年 03 月
- ▼アイヌ韻文の朗唱法：カムイユカラの抑揚（アイヌ・先住民言語アーカイヴプロジェクト報告書：2021）
丹菊逸治著，北海道大学アイヌ・先住民研究センター，312p+挿図-30cm. 2022 (R04)年 03 月
- ▼東歌を読む：「歌路」の理論から読み解く東国の歌謡
辰巳正明著，新典社，334p-21cm. 2022 (R04)年 03 月
- ▼アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と言語の変容に関する総合的研究
久保智之 [ほか] 編，九州大学人文科学研究院，viii+183p-26cm. 2022 (R04)年 03 月
- ▼移動とことば 2
川上郁雄，三宅和子，岩崎典子編，くろしお出版，ii+255p+挿図-21cm. 2022 (R04)年 03 月
- ▼インタビューでふりかえる宮城県名取市の「方言を語り残そう会」の軌跡：東日本大震災を乗り越え、コロナ禍を生き抜く
榎引祐希子，方言を語り残そう会 [制作]，東北大学方言研究センター，DVD1 枚-12cm. 2022 (R04)年 03 月
- ▼英語のジェンダー（開拓社言語・文化選書 93）
神崎高明著，開拓社，xiii+185p-19cm. 2022 (R04)年 03 月
- ▼会話における情意表現の役割（言語文化共同研究プロジェクト）
大阪大学大学院言語文化研究科編，岡田悠佑 [ほか] 執筆，大阪大学大学院言語文化研究科，39p+挿図-30cm. 2022 (R04)年 03 月
- ▼感動詞研究の展開（ひつじ研究叢書（言語編）第 182 巻）
友定賢治編，ひつじ書房，xii+337p+挿図-22cm. 2022 (R04)年 03 月
- ▼北近江地名考：土地に息づく歴史

- 太田浩司著, サンライズ出版, 208p-19cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼言語コミュニケーションの多様性
窪菌晴夫, 朝日祥之編, くろしお出版, iii+209p-21cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼古代日本語と万葉集の表象
和田明美著, 汲古書院, vi+364+39p+挿図+地図-22cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼甲南大学キャンパスことば辞典 1992・2009・2022: パンキョー・コーイキ・キノキョーツー
都染直也編, 甲南大学文学部都染研究室, 192p-30cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼椎葉村方言語彙集
椎葉村方言語彙集編集委員会編, 宮城県椎葉村, 国立国語研究所, 788p+挿図+地図-21cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼シマの記憶: 徳之島町史民俗編
徳之島町誌編纂室編集, 南方新社, 359p+図版[7]p+挿図+地図+肖像-30cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼社会言語学: 基本からディスコース分析まで (改訂版)
岩田祐子, 重光由加, 村田泰美著, ひつじ書房, xvi+349p+挿図-21cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼集団語の研究: 下巻
米川明彦著, 東京堂出版, xxviii+736p-22cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼全国アホ・バカ方言の研究: 口頭発表と質疑応答
松本修制作, 松本修, DVD1 枚-12cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼全国方言文法辞典資料集 7: 活用体系 5 (科学研究費補助金(基盤研究 A) 研究成果報告書: [『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語の時空間変異対照研究の多角的展開])
方言文法研究会編, [方言文法研究会], 106p+地図-30cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼多言語化する学校と複言語教育: 移民の子どものための教育支援を考える
大山万容, 清田淳子, 西山教行編著, 浜田麻里 [ほか著], 明石書店, 182p-21cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼立川市域の古墳時代 (新編立川市史調査報告書: 先史編 3)
立川市史編さん先史部会編, 立川市, vi+86p+図版[2]p+挿図-30cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼旅する日本語: 方法としての外地巡礼
中川成美, 西成彦編著, アンドレ・ヘイグ [ほか] 著, 松籟社, 349p-20cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼地域文化の可能性
木部暢子編, 勉誠出版, 6+193p+図版 [14] p+挿図+地図-21cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼地図で読み解く奈良 (奈良女子大学文学部「まほろば」叢書)
浅田晴久編著, かもがわ出版, 159p+挿図+地図-21cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼新潟県方言関係全資料目録: 2004 年 (平成 16 年) 1 月-2022 年 (令和 4 年) 3 月
外山正恭編著, 外山正恭, 1 冊-17×26cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼日本の消滅危機言語・方言の文法記述
セリック・ケナン [ほか] 編, 国立国語研究所言語変異研究領域, 536p+図版 [6] p+挿図-30cm. 2022 (R04) 年 03 月

- ▼被災地方言の保存・継承のための方言会話の記録と公開 5
東北大学方言研究センター編，東北大学大学院文学研究科国語学研究室，104p+挿図-30cm.
2022 (R04) 年 03 月
- ▼文化とイデオロギー（言語文化共同研究プロジェクト）
大阪大学大学院言語文化研究科編，Oliver Aumann [ほか] 執筆，大阪大学大学院言語文化研究科，
42p+挿図-30cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼まっだしでヨカですか!?: 熊本弁コーヂ苑ファイナル
工事郎著，熊日出版（発売），255 p-21cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼南琉球宮古語池間方言辞典
仲間博之 [ほか] 編著，国立国語研究所言語変異研究領域，xxviii+428p-27cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼みんなふつ語彙集：水納島方言
大浦辰夫，セリック・ケナン著，国立国語研究所言語変異研究領域，387p+図版 [4] p-21cm.
2022 (R04) 年 03 月
- ▼訳注琉球文学：『佐銘川大ぬし由来記』『周蘭両姓記事』『思出草』『浮繩雅文集』『雨夜物語』『永
峰和文』（叢書・沖縄を知る）
島村幸一，小此木敏明，屋良健一郎著，勉誠出版（発売），28+453+4p+挿図+地図-22cm.
2022 (R04) 年 03 月
- ▼論文から学ぶ地域調査：地域について卒論・レポートを書く人のためのガイドブック
阿部康久，土屋純，山元貴継編，ナカニシヤ出版，ix+218p+挿図+地図-21cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼若狭あどろがたり集成：昔話・伝説・語り部（若狭路文化叢書：第17集）
金田久璋採話・編集，ふくい昔ばなし大学再話研究会再話，岩田書院（発売），297p-21cm.
2022 (R04) 年 03 月
- ▼「碧南方言（ことば）」親近感診断テスト：問題・解答用紙・正解と解説
碧南言語歴史研究会[編]，碧南言語歴史研究会，22+[2]+8p-26cm. 2022 (R04) 年 04 月
- ▼運動を表さない動詞述語文の研究：アスペクト・テンス形式の分布をめぐって（人文科学の一流
的研究を目指す博士論文叢書10）
呉揚著，日中言語文化出版社，vii+180p-21cm. 2022 (R04) 年 04 月
- ▼きょうから使おう 英語で熊本弁
武田修幸著，熊本日日新聞社，157p-21cm. 2022 (R04) 年 04 月
- ▼記憶のなかの「碧南方言（ことば）」：語彙・語法・音韻の特徴
石川文也著，春風社，224p-21cm. 2022 (R04) 年 04 月
- ▼言語学者、外の世界へ羽ばたく：ラッパー・声優・歌手とのコラボからプリキュア・ポケモン名
の分析まで（リベラルアーツコトバ双書2）
川原繁人著，教養検定会議，viii+167p+挿図-18cm. 2022 (R04) 年 04 月
- ▼言葉の周囲分布考（インターナショナル新書099）
松本修著，集英社，301p+地図-18cm. 2022 (R04) 年 04 月

- ▼地図で読み解く関西のことば
岸江信介, 中井精一編, 昭和堂, vi+281p-21cm. 2022 (R04) 年 04 月
- ▼アспектとその周辺
三原健一著, くろしお出版, viii+274p-21cm. 2022 (R04) 年 05 月
- ▼沖縄を求めて沖縄を生きる：大城立裕追悼論集
又吉栄喜 [ほか] 編, インパクト出版会, 387p-19cm. 2022 (R04) 年 05 月
- ▼音声学者、娘とことばの不思議に飛び込む：プリチュワからカピチュウ、おっけーぐるぐるまで
川原繁人著, 朝日出版社, 276p+挿図-19cm. 2022 (R04) 年 05 月
- ▼旧市町村名便覧：明治 22 年から現在まで（第 3 版）
日本加除出版株式会社編集部編, 日本加除出版, v+787p-26cm. 2022 (R04) 年 05 月
- ▼日本近代村落の起源
松沢裕作著, 岩波書店, xiii+317+8p+挿図-22cm. 2022 (R04) 年 05 月
- ▼福井県嶺北方言のアクセント研究（日本語学会論文賞叢書 3）
松倉昂平著, 武蔵野書院, ii+309p+挿図-22cm. 2022 (R04) 年 05 月
- ▼若者言葉の研究：SNS 時代の言語変化
堀尾佳以著, 九州大学出版会, 228p-20cm. 2022 (R04) 年 05 月
- ▼AI・データ倫理の教科書
福岡真之介著, 弘文堂, xi+314+36p+挿図-19cm. 2022 (R04) 年 06 月
- ▼あなたの知らない、世界の希少言語：世界 6 大陸、100 言語を全力調査！
ゾラン・ニコリッチ著, 藤村奈緒美訳, 山越康裕, 塩原朝子日本語版監修, 日経ナショナルジオグラフィック, 日経 BP マーケティング（発売）, 240p+挿図+地図-21cm. 2022 (R04) 年 06 月
- ▼一人称研究の実践と理論：「ひとが生きるリアリティ」に迫るために
諏訪正樹著, 近代科学社, xiv+239p-21cm. 2022 (R04) 年 06 月
- ▼一人称の過去：歴史記述における「私」（ポイエーシス叢書 76）
エンツォ・トラヴェルソ著, 宇京頼三訳, 未来社, 185p-20cm. 2022 (R04) 年 06 月
- ▼書き言葉と話し言葉の格助詞：コーパスと辞書記述の観点から（ひつじ研究叢書（言語編）第 190 巻）
丸山直子著, ひつじ書房, ix+373p-22cm. 2022 (R04) 年 06 月
- ▼言語の標準化を考える：日中英独仏「対照言語史」の試み
高田博行, 田中牧郎, 堀田隆一編著, 大修館書店, viii+247p+挿図+地図-21cm. 2022 (R04) 年 06 月
- ▼台湾日本語世代からの遺言：トオサンの桜
平野久美子著, 潮書房光人新社, 292p+挿図+肖像+地図-16cm. 2022 (R04) 年 06 月
- ▼Argumentative style : a pragma-dialectical study of functional variety in argumentative discourse
Frans H. van Eemeren ... [et al.], Amsterdam ; Philadelphia : John Benjamins Publishing Company, x+332p. +ill. -25cm. 2022 (R04) 年 07 月

- ▼アイヌ文化史辞典
関根達人 [ほか] 編, 吉川弘文館, 26+636+39p+図版 [4] p+挿図+地図-23cm. 2022 (R04) 年 07 月
- ▼あいまい・ぼんやり語辞典
森山卓郎編, 東京堂出版, 12+224p-19cm. 2022 (R04) 年 07 月
- ▼あっぱれから適まで: ある国字の盛衰
西井辰夫著, 幻冬舎 (発売), 165p-19cm. 2022 (R04) 年 07 月
- ▼日本古典風俗辞典 (角川ソフィア文庫)
室伏信助, 小林祥次郎, 武田友宏, 鈴木真弓 [執筆], KADOKAWA, 460p+挿図-15cm. 2022 (R04) 年 07 月
- ▼吉原と江戸ことば考
棚橋正博著, ペリかん社, 395p-22cm. 2022 (R04) 年 07 月
- ▼ロジカルな文章、情緒的な文章: 相手によって使い分ける
坂本宗之祐著, クロスメディア・パブリッシング, インプレス (発売), 263p-19cm.
2022 (R04) 年 07 月
- ▼スキマ歩きの日本語学 言語変化のダイナミズムを紡ぐ
金澤裕之著, 花鳥社, 307p-21cm. 2022 (R04) 年 08 月
- ▼日本語の類型
風間伸次郎著, 三省堂, 671p-22cm. 2022 (R04) 年 08 月
- ▼歴史の周辺をさまよって: 人種、ジェンダー、そして人の移動: 談話会 (人文研ブックレット 39)
松本悠子著, 中央大学人文科学研究所, 35p+挿図-19cm. 2022 (R04) 年 08 月
(担当: 山岡華菜子)

— お 知 ら せ —

〈次回のお知らせ〉

次回の第 116 回の研究発表会は、**2023 年 5 月 19 日（金）**（日本語学会春季大会前日）に**青山学院大学青山キャンパス**（東京都渋谷区）で現地開催の予定です。

〈発表募集〉

1. 応募資格・条件：方言研究に関心をお持ちの方なら、どなたでも応募することができます。研究発表は、日本語方言とその関連領域に関する未発表のものとし、1 題につき発表 30 分、質疑 20 分（予定）です。
2. 応募締切：**2023 年 2 月 9 日（木）** 必着
3. 応募書類：次の 2 点（A4 判用紙計 2 枚）をご提出ください。
 - a. 申込書：A4 判用紙 1 枚に、発表題目・氏名・所属・研究略歴・連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）を記載してください。
 - b. 発表要旨：冒頭に発表題目を記した上で、研究の目的・方法・結論を具体的に明記してください。氏名・所属は記載せず、本文においても応募者が特定できるような表現を避けてください。分量は、図表等込みで A4 判用紙 1 枚以内です。
4. 応募先と応募方法：下記連絡先①（研究発表会委員会）宛に、メールの添付ファイル（Microsoft Word もしくは PDF）でお送りください。その場合、特殊な記号を使うなど、文字化けが予想される場合には、郵便でもお送りください。なお、メールをお使いでない方は、郵便でお送りください。
5. 応募可能数：筆頭発表者として応募できるのは 1 件です。応募書類の提出者を筆頭発表者として扱います。
6. その他：研究発表会委員会で審査の上、採否を決定します。採用決定後、発表題目、発表者名（連名発表の場合、氏名の順序も）は変更できません。採用された方には、**2023 年 4 月 17 日（月）**までに発表原稿集の原稿を提出していただきます。その他、詳細はホームページをご覧ください。

連絡先①

研究発表会委員会（委員長：小林隆）
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 27-1

東北大学大学院文学研究科
国語学研究室気付
hougen-happyou@e-mail.jp

連絡先②

事務局（総務委員長：船木礼子）
〒654-8585 兵庫県神戸市須磨区

東須磨青山 2-1
神戸女子大学文学部
日本語日本文学科気付
hougen-jim@e-mail.jp

日本方言研究会ホームページ <http://dialectology-jp.org/>

Conference Papers of the Dialectological Circle of Japan

No.115 (November 5, 2022), online

1. TSUBOI Nao: The actual usage of honorific forms by young people in Nagahama city, Shiga, and how their usage has changed: Focusing on the (*ya*)*aru* construction
2. BAYU Bagus Mahendra: Regional differences in prohibitive and request language behaviour among youths of the Kinki region and the Tokyo Metropolitan area: Suggestions for dialect understanding tools
3. SATO Miina: The actual use of dialect in TV dramas and the intentions of the producers
4. SAKURAI Yoshiki: Distribution of variant forms of words for OTEDAMA in Mie prefecture and the factors behind the distribution
5. KUNO Mariko, TAKEUCHI Haruka, SAKAMOTO Kaoru: Linguistic change and the geolinguistic distribution of Tokyo dialect: The New Linguistic Atlas of Tokyo